

文樂座人形浄瑠璃

初春興行
總出演



假

名



手



忠



本

臣



藏



文樂座

四橋

一部 金十五錢

謹賀新年

浦々の巖に映ゆる旭光の輝き、その御晴々とした御機嫌の程お欣び申上げます。本年も相變らせられず御ひるき御愛顧下さいますやうお希ひ申します。

一月元旦

若き昭和日本の武威彌々輝く佳しき新春を迎へて文樂座人形淨瑠璃も一大飛躍を試みるべく、總出演に、世界を壓倒する日本武士道精神の華さも謂ふべき「假名手本忠臣蔵」を大序より八ッ目道行迄通し上演さういふ堂々の陣容に御座ぬます、各語場も興味溢るゝ新配役にて必ずや御満悦を賜はる自信を持てぬます、祖國愛の大叫されてゐる當今、我等の父祖が相傳へ稱へて來たる、この不朽の名作に加て絶好の役場たる當興行を御觀望下さいまして、非常時日本の念を更に深め度いさ存じます、新年更生の折柄皆様お誘合され御聲援下さいますやうにお願ひ申上げます。

文樂座一同

昭和八年一月一日初日

初 日午後二時開幕
二日目より午後三時開幕

御觀覽料

- 一等椅子席御一名 金三圓
- 二等 席御一名 金一圓五十錢
- 三等 席御一名 金八十錢
- 一等お座席御一名 金三圓五十錢

一等お座席は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
專用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬます、靴草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

すま希へ部輯編座樂文は向の望希載掲御告廣トツカへ誌本

永井日英堂印刷所

大坂市西區土佐堀通一丁目
長三〇九四番
長四九九番
長一四四番
土佐堀(44)番

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

三味線

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

天香堂大天香堂大天香堂大天香堂大

文樂座人形浄瑠璃

初春興行

豫定時刻表 二日目のりよ

假名手本忠臣藏 か な て ほん ちゆう しん くら

大孝兜改めより
道行旅路の嫁入まで

兜改めの段 (三時より三時三十分まで)

幕間 十分間

殿中又傷の段 (三時四十分より四時十分まで)

裏門の段 (四時十分より四時廿五分まで)

扇ヶ谷の段 (四時二十五分より五時廿五分まで)

幕間 二十五分間

山崎街道の段 (五時五十分より六時五分まで)

二ツ玉の段 (六時五分より六時三十分まで)

身賣りの段 (六時三十分より六時五十五分まで)

勘平切腹の段 (六時五十五分より七時四十分まで)

幕間 二十分間

一力茶屋の段 (八時より九時二十分まで)

幕間 十分間

道行旅路の嫁入 (九時三十分より十時まで)

忠臣藏初興行のこゝろ

竹田出雲と周囲の人々

近松門左衛門逝き、竹本播磨少掾歿後の淨瑠璃界は、當然の歸趨でもつて、その實權が作者としての奇才興行主としての辣腕家たる、竹田出雲の手に移つて、義太夫節は暫く太夫を離れ、従つてすこしづゝ其容を變へて行くのは是非もないことであつた。すでに十五歳にして竹本座の座主であつた（父竹田近江の後見はあつたにせよ）出雲は長ずるに従つて十二分の經驗に加ふるに、殆んど天才的の手腕をもつて縦横に活躍したのである。さうして道頓堀の黄金時代、古今無比の最盛期を現出したと傳へられる。

撲の如く東西に別れ、町中近國ヒイキをなし操りの繁昌言はん方なし。こ云ひ、又寶曆版の『竹豊故事』には操り繁昌し東は西に負けじ、西は東に勝たんこ互ひに勵み出来、益々芝居繁昌し、淨瑠璃の作者種々様々の趣向をあみ出し、道具立衣裳に金銀を措します、美麗を盪し、町中の若い衆、豊竹講、竹本講と號し、毎月掛け錢を集め置き、替り淨瑠璃の節進物の入用に仕玉ふさかや、偕々奇特千萬なる心中益々信仰なきるべし。

十三歳の時、松田和吉との合作で『大塔宮囃子』を書き、近松の添削を乞ふて、その處女作を發表し、その二度目には（同年十一月『櫻町名花昔』といふ世話物を書いたが、これは失敗に終つて發表をしなかつたばかりか、後眞世話物は書かぬと決心をしたこの事である。さうしてあるうちに近松が死んだが爲に、いよいよ彼は筆を揮はれねばならぬ時機に達し、享保十年九月には『大内裏大友眞鳥』の傑作を發表して大好評を取り、眞鳥の本と鼠の糞は何處の家にもあると云はれる程に、一時に文名が高まつた。ましてや敵方である東の芝居の豊竹座の作者、紀海音が享保八年七月『傾城無間鐘』を終りまして引退してしまつたので、彼の時代が到來したわけである。すでに現今著名なる、

『忠臣藏』『千本櫻』『菅原』『双蝶々』『平假名盛衰記』『小野道風』『陣紅葉』（大塔宮）（以上合作）『大友眞鳥』『五鷹金』『芦屋道満』（以

延享版の『淨るり譜』は

此頃操り流行して歌舞伎は無きが如し、芝居表は數百本の幟、進物等數を知らず、東豊竹、西竹本と、相

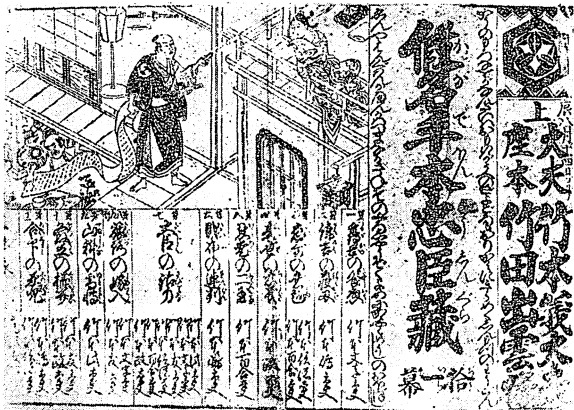
と云つてあるところをもつて、略ぼその盛觀を察することが出来る。されば淨瑠璃界に一轉機を起した傑作出雲の作物を通じてその興行ぶりを見てみやう。作者としての出雲は近松在世のころ、享保八年二月、三

上單獨作)の十二編を始めその他十二編

の作を見ても解る通り、從來の近松時代の淨瑠璃本位に比して舞臺は著るしく人形本位に傾いて來て即ち歌舞伎化されて來たのである。云ひ換へれば少數が聽いて味ふ藝術が、目に訴へて大衆を迎ふる藝術に變化して來たのである。いふまでもなく興行主であつて作者を兼ねた彼れが當然の執るべき道であつたのである。而かもその傾向は夥しい社會の反響を受けたので。出雲の技能は人形遣ひ吉田文三郎の卓抜な技倆と相俟つて、新しい形式をさし／＼と試み、觀客をして應接に違なからしめてある。さうして人形界と歌舞伎界の双方へ向けて多くの貢獻を遺すことの出來たのは偉とせねばならない。その新形式の重なる一部を記してある

●國性爺の引道具を工夫する、九仙山の景事、千里の數、數門、なご支那を想像せしめる珍奇の趣向：正徳五年十一月

●曾我會稽山十塲を一晝夜に仕組み、舞臺の上部に(砂時計)



このお付は
寛延元年八月十四日竹本座初演の時の番付です、この
時分は床とテスリの二枚付でありました。

- 人形舞臺を重要視して從來正面に在つた大夫の床を左遷して、舞臺全部を提供して、いよ／＼大道具大仕掛け人形活躍の便宜を謀る時に加賀國篠原合戦上演……享保十三年五月。
- 人形の指先動く仕掛けにする。『車返合戦櫻』の大森彦七……享保十八年四月。
- 從來は突込みと稱して兩手で人形を差上げて遣つてゐた式を改めて三人遣ひとする。『芦屋道満大内鑑』の與勘平、彌勘平の腹ふくらし……享保十九年十月。
- 人形の肩動く仕掛けにする。『赤松圓心縁陣幕』本間入道の肩……元文元年二月。
- 寫實式の舞臺『夏祭浪花鑑』本水本泥を用ふる試み、

帷子を人形に着せる……延享二年七月。

●人形の耳動く仕掛けにする。
『義經千本櫻』忠信狐……延享四年十一月。

●能獅子を用ふ。『戀女房染分手綱』五ツ目。道成寺の所作……寶曆元年 月。
以上大要。

出雲が生涯の大事件として、人形が如何に重要視せられたかといふ一例證として、果また藝界の一佳話として、而かもそれがお馴染の『假名手本忠臣藏』の初興行にからまる大騒ぎだつたのだから、悉しく説く必要がある。竹田出雲、三好松洛、並木千柳が京都の歌舞伎中村宗十郎座の『大矢敷四十七本』といふ義士の芝居を見て、すぐ三人が合作で書き上げた『假名手本忠臣藏』が竹本座に上演されたのは、寛延元年八月十四日からのことだつた。その忠臣藏があらゆる澤山の義士復仇の芝居を出し抜いて百八十餘年を経た現今ま

で、いまだに歌舞伎や淨瑠璃の獨參湯と稱されて上演せられてゐるほど



竹本座初演の番付で、人形の役領を付、吉田文三郎の俵八太郎此時吉田文吾と改名す。

だから、書卸のその當時の人氣も推して知るべしである、これは開場して程經ぬ或る日のこと、こゝにゆくりなくも一騒ぎが持ち上つて來た。人形の頭領吉田文三郎はいふまでもなく由良之助の人形を遣つてゐた、その文三郎が九段目の山科を語つてゐる太夫の領領竹本此太夫（後に竹本筑前少掾）の部屋へぬつて現はれて來て、

先達てから申し入れたく思ひ居しが、つい／＼差控へ、言ひおくれたれど、打ち明けて申し談じたき儀あり……。

さかういふ前置きで、舞臺上の相談にやつて來た。その相談といふのは、山科の場て由良之助が本藏に向つて本心を明かし師直邸へ忍び入り用心の雨戸を外づす考案を實地に示す條『仕様をこゝに見せ申さんと庭に……』といふ語り場を、今少し間を伸して語つて貰ひたい、伸

して貰はないと庭に下りて駒下駄を履き竹藪の傍まで行く間の動作がどうも窮屈でいけない、思入れも充分に出来ずどうも遣ひ苦しいから……。

こまわ頼み込む體裁で喋つたと思はれる。

ところがこの相談に對して、此太夫は、もう今までに日數も可なり打續けて來てゐる、いまさら節や地合を變更することは出来ない元來かういふことは初日に語り定めた上はどうにもなるものではない、初日同然幾日経ても語り口に狂ひの無いのが私の生命なのだから、それをうか／＼と變更するやうなことがあつては第一私の信用に關はる、だから残念ながら此御相談には應じ兼ねる。と判然と突きにした。かう云はれると、文三郎さて一旦云ひ出した言葉の上黙つてそのまゝ引つ込んでしまふ譯には行かない。そればかりか實際この庭に、の條には思ひあぐんだのだから思案の變へやうがない、だからもう一度強く、而かもすこし

皮肉を交せて、さう貴君に云はれるだらうと思つた、私も今日まで貴君の方から此ことを注意してくれるだらうと思つて實は心待ちに待つてゐたのだ、元來楯下の責任者として名

ある此太夫もあらうものが『此場合定めし人形は遣ひ難くからう』といふ察しがつかないとは……。さうこし喧嘩腰だつたから憎まれ口を利いた。此太夫さて藝術上のことで一旦吐いた自説は平生の信條に對しても急に狂げるわけには行かないのである。改める、改めない、といふ押問答で、結局互ひに血相を變へて云ひ争ふたが、どうにも解決がつかない。このことを聞きつけて座主の出雲と二代目の政太夫。三味線の友二郎等が仲に飛んで入つて、さりげなく、まあ／＼と二人を無理に靜めて懇々と双方の云ひ分を聴いて見たがどちらも頑として主張を枉げやうとはしない。それで餘儀なく双方を其夜は無事に自宅へ送り歸へしたが、サテ困つたのは出雲である。何方か

一方が折れてくれなければ明日の芝居を開けることが出来ない、さうしてどちらの主張にも道理があるのだからちよつと厄介だ。

そこで出雲はその善後策を協議する爲めに一座の重なる關係者を、閉場後の樂屋に召集して、所謂秘密會議を開いたが、ういふ會議といふものはいつの場合でも同じやうに、喧々囂々として、なか／＼とましまりのつかないものであることは誰れにも經驗のあることで、凡そは想像出來るが、結局は座長たる出雲の言葉の一點が議場に於ける濃厚な空氣をつくり上げてやがて歸着點を見出すことになる。大半は賛成々々といふやうな手を揚げて會議は數時間を費して結局となる段ざりである。その所謂多數決によつて決せられたところでは、文三郎は當時竹本座を背負つて立つ唯一の人氣者、ここに今度の人形は宗十郎以上の至藝で神業さまで稱讚されてゐるから、此太夫といふ名人を失ふのも惜しいには惜しい

が、どうも文三郎を失つては竹本座全體の損失が多きい、だからもう一度此大夫に〇歩を勸告して、萬一承知をしない場合は休場をさせるより致し方がない。此決議案は早速此大夫の方へ通知されたが、遺がは此大夫だ、すぐに休場を快諾して、己れの藝の自信を重んじて竹本座櫓下の名譽を古下駄を捨てるやうに捨て、しまつた、これでこの問題は一先づ解決したが、あこの問題は此大夫に代つて九段目を受持つ大夫を選定せなければならぬことである。これも可なり大問題だ。出雲は頭を悩ました、ふさ立派な候補者が思ひ當つたそれは竹本座の創立にもつるも縁故の深い故内匠理大夫の實子、豊竹上野少掾である、出雲は早速駈つけ、情理を盡して竹本座の浮沈に關はる大事の場合、是非出場を承諾して貰ひたいと懇願した。上野少掾も出雲の熱誠に動かされて半は承諾をしたが、その前に一應此大夫と會見をしたいと云つた。そこで早速此太

夫に通じて、日本橋一丁目の出雲の宅で三人は會見した。上野少掾は此大夫に向つて竹本座引繼ぎの挨拶を述べた、此大夫も快よくこれに答へさうしてお互ひに九段目の作意やら語り口など藝術談をして恰も百年の知己の感があり、好都合に運ばれて行き、ごうやら無事に濟んだ。出雲はほつと吐息をついたのである。これだけの波瀾重疊が、たつた一夜の中に、出雲の努力で收まつたのである。かうして竹本座は幸ひに休場をせずして打ち續けることが出来、これが間もなく市中の評判となつて一層の好人氣、上野少掾は竹本大隅掾と改名して、これも甚だ好評、興行日數の積む程に益々人氣は騰るばかりである。何が幸ひになるかわからないものだ。さてこの問題に關聯して大隅掾の人格を物語るべき美しい例證がある。

出版用院本の原稿を見るに七つ目掛合ひの由良之助は「因」であつてちやんと大隅の名に代へられてゐる。これを見た大隅は斷じてこれを拒んで、かう云つた。自分は途中代り役として勤めてゐるのである院本は末代まで残る大切の記念だから、譬へ此座を退座して行つても、當然此大夫の名義を用ひなければならぬ。さかういふ理由で急に「因」の字を削らせて「因」の字に改めさせた。謙〇の人で無くては出来ない業である。現在七つ目の院本由良之助役に「因」の一字が入つてゐるのは、かうした美談がたつた一字に含まれて斯道の人々に何かの暗示を與へてゐる。

さうして一方此座を退いて行つた竹本此大夫はごうなつたかといふことは人々の勸めにまかして、島大夫、百合大夫などを率ゐて、東の芝居豊竹座に轉じて櫓下に据はつたがこれも飽くまで善意で酬ひて、わざ／＼竹本座の『忠臣藏』の終るのを待つて、同年十一月十四日初日

攝州渡邊橋供養』を上演してゐる。

ところも、此方も脱退一件や何かで市中の噂となつてゐるだけに、意外な人氣が集まつて翌年の三月まで五ヶ月に亘る大入満員といふ芽出度さである。かういふ次第で、興行界はいつも空氣を新鮮にする爲めに入れ替へをしなければいけない、さういふ先例が作られて、その後の兩座へは、時々太夫の入れ替へが行はれてゐるこの東西兩座の出方が混亂するさ云ふ事は此時が始めて、古來の一座固定式が自ら打破された譯である。

二百年の後までも、絶え間なく、多くの見物を騒がして來た『假名手本忠臣藏』は、先づ初興行からしてかうした大きな興行主兼作者太夫、人形を騒がしたのだつた。此時、出雲五十八歳、此太夫四十九歳、大隅四十七歳、文三郎も五十歳前後であつた。

出雲の略歴を摘記する。

元祿四年大阪に生る（江戸説もある）

寶曆六年十一月四日歿す。（行年六十六歳）

幼名三四郎。後清定。號千前軒（千日寺の前の意、住宅から名付く）。定紋、竹の丸に九枚笹。立慶町、吉右衛門町（清津橋より戎橋までの間）兩町の年寄役を勤む。

墓地、生玉寺町青蓮寺。法名、文明院峯松立顯居士。

門人、小出雲、吉田冠子（文三郎）

竹田正藏（爲永太郎兵衛）竹田外記

竹田瀧彦。竹本三郎兵衛。竹田因幡

竹田和泉。竹田平七。竹田伊豆。竹田土丸。二步堂。松田和吉。その他

竹田出雲の股肱となつて其大業を

援け、此太夫と覇を争つて自ら重きを爲した吉田文三郎は、一面吉田冠

子の名を以て之れ又淨瑠璃の作をのこしてゐるところを見るに、精力家

であると同時に、よほど卓抜の技術をもつてゐる人には違ひない。人形

藝術の上に文三郎の發案として現にそのまゝを踏襲してゐる幾つかの例

を擧げることが出来るが、床の淨瑠

璃が歌舞伎式になると同じやうに文三郎の人形も當時としては随分寫實

風になつて來たのであらう。その爲め人形の世界に新しい境地がづん

／＼見出されて行つたのである。たしかに名匠には違ひなかつた。『夏祭浪花鑑』で始めて人形に帷子を着

せ、（お辰の扮、装枯梗の帷子、黒繻子の前帶、淺黃綿帽子。）後世にその型を傳へた如き。或は『義經千本櫻』の道行で狐忠信の耳を動かした黒地に縫金の源氏車の模様を考案した『忠臣藏』の由良之助に二つ巴を付けた。そんな例は擧げればきりがないほどである。

文三郎の人形には人間の魂が躍動してゐると傳へ、それが一つの怪談嘶になつてのこつてもゐる。おなじみの五大力の狂言のその元の菊野殺しの芝居についてゐる。『薩摩歌妓鑑』といふのが本題である。（近松平二や吉田冠子即ち文三郎等の合作）主人公の早田八右衛門が、嫉妬に燃えて、血刀を提げながら、四邊

を探し廻はる途端、すべに殺されてゐた藝妓菊野の死骸の疵口へ片足を踏み込み、爪先に腸を引かけてひき上る科がある。これは文三郎の型であるが、如何にも寫實で眞に迫つてゐて凄惨の氣を唆りそうな場面である歌舞伎の方などでも後年この狂言を『初嵐元文嘶』と改題して、道頓堀で柴崎林左衛門が勤めたが、この時すべかり此文三郎の型を用ひたころが、こゝは人形でなく、實際の人間が演ずるのだから、あまり慘酷で見てゐられない、さいふので評判がよくなかつた。晝間文三郎によつて魂を吹き込まれた八右衛門の人形が、夜になつて、人静まつた時、一人で、文三郎に使はれてゐる通りなくりかへし、時には結び上げた髪を振り亂して大荒れに荒れ狂ふ。朝になつて樂屋へ入つたものは此容子を見て膽をつぶして驚く。又或時は肌脱ぎになつて大刀を抜いたまゝ、さも勞れ果てたやうになつて樂屋の入口に仆れてゐる。或る小屋番は彼

の人形が一人で闇をさぐりながら歩いて行くので、後をつけて行くこゝ、流し場へ下りて水甕に首を突つ込んで舌鼓を打つて水を貪り飲んだ。かういふ風にその當時のこゝが、さも實際に見て來たやうに傳へられてゐるが、眞偽はどうでもいゝ、文三郎の人形が如何に如實に人間そのまゝの動作をもつて見物に迫つて來たか、さいふこゝが想像出來ればよい。



鶴ヶ岡兜改めの段

假名手本忠臣蔵

大序鶴ヶ岡兜改めより
道行旅路の嫁入まで

足利直義公	竹本町太夫
高野師直	竹本鏡太夫
鹽谷判官	竹本南部太夫
桃井若狹之助	竹本小春太夫
顔世御前	豊竹つばめ太夫
	豊竹つばめ太夫
	鶴澤仙
	糸叶

人形

高野師直	桐竹門造
鹽谷判官	吉田三玉
桃井若狹之助	吉田光之助
足利直義	吉田文二郎
顔世御前	吉田扇太郎
大名	大い

この「假名手本忠臣蔵」は寛延元年八月の（今から百八十五年前）竹本座の操にかけられたもので、竹田出雲が正、三好松洛、並木千柳等が補で書下された日本演劇史を代表する最大傑作である。

足利將軍尊氏公は新田義貞を討つてその兜を鶴ヶ岡八幡宮に奉納するに就て今日社頭に兜改めが行はれたが、鹽谷判官の妻顔世御前は曾て兵庫司の女官を勤めた故、兜改め役として召され多くの兜の内、焚きしめた蘭奢待の名香に直にそれを見分けた。

この度將軍家接待の役目を承つたのは鹽谷と桃井でその禮儀作法萬般の師範役は高野師直である。殿中で桃井も師直に會ふと平伏せんばかりに下に出たので怒も何處へやら消えてしまつた。これは本蔵の深慮で賂賄を贈つたからである。鹽谷からは賂賄がない上に顔世に對する戀の憎みがあるので師直は鹽谷を殿中で散々に苛め恥しめた。短氣の鹽谷は前後を辨へず鯉口切つて師直に斬りつけた。後から抱き止めたのは本蔵であつた。殿中で及傷に及んだ鹽谷判官

女好きの高野師直は和歌に事よせて顔世に艶書を送る。短氣な桃井若狹介介意地悪な高野師直と大口論を始め、あはや神前に鯉口を切る所を僅に事なく済む。

は切腹を申しつけられてお家断絶といふことになつた。此處に忠臣と不忠臣との色分けが見えた。家老大星由良の助け深い分別を以て速る若武者を鎮めて城を明け渡し悄然と山科へ去る。金に眼の眩んだ搦谷の不忠臣斧九太夫の子定九郎は浪人の生計に困つて、山崎街道で夜盗を働き通りかゝつたお輕の父與市兵衛はお輕が勘平の爲に身を賣つた金子五十兩と命もろとも定九郎の爲に奪はれた。猪撃ちに出た勘平の二つ彈丸は誤つて、美事に定九郎に當る。奪つた縞の財布の五十兩は計らず勘平の手に入る。歸りが遅いと察じられた與市兵衛の宅へはその死骸がかつき込まれた。勘平は縞の財布をそつと取出して見て昨夜闇まぎれに撃つた

のは舅と早合點した。姑お萱もそれと推して怒り歎く。勘平はたさひ主君の仇討ち御用金調達のため現在の身を殺して金子を取つた事言譯立たず、面目なきに切腹した。其處へ千崎彌五郎、原郷右衛門の兩士が来て刀傷と鐵砲傷は違ふと勘平の冤罪は晴れ臨終に一味の血判状へ加へられた。由良の助け敵討ちの本心を包んで祇園の力茶屋にお輕を相手に日毎放埒な浮れ酒、九太夫は敵の謀者となつて大星の本心をうかす。力彌が持參した顔世御前から

の密書を大星が讀んであるとお輕が二階でのべ鏡、九太夫は縁の下から眼鏡越しにのぞく。大星は大事を知つたお輕の命を見平右衛門に命じて取らうとしたがその真心が見へたので助けた。お輕は九太夫を刺して勘平の身替りに功を立てる。旅路の嫁入は大星力彌と許嫁の仲にある加古川本藏の娘小浪は母の戸無瀬に連れられて山科にある大星の閑居を訪れるのです。その途すがらのいこ面白きいこ華やかな錦繪美たつぶりな條りです。忠と義親子恩愛の情懷を見せたる破亂曲折の裡に日本武士道の精華を語るさいふ不朽の名作です。

(床本) 鶴ヶ岡兜改の段

後にかほよはつきほなく師直様は今暫し御苦勞ながらお役目をお仕舞有ておしづかにお暇の出たこのかほよ長居は恐れおさらばせ立上る袖摺寄てじつと扣へコレまあお待ち待

たまへけふの御用仕廻次第其元へ推
参して、お目にかけるものも有幸ひ
のよい所召出された直義公は我爲の
結ぶの神御存じのごとく我等歌道に
心を寄せ吉田の兼好を師範と頼み日
々の状通其元へ届けくれよと問合せ
の此書状いかにもその御返事は口上
でも苦しいと袂から袂へいりい
結び文顔に似合ぬ存参る武藏鎧と書
たるを見るよりはつと思へ共はし
たのふ恥しめて却つて夫の名の出る
こと持歸つて夫に見せふかいやく
夫では搦谷殿憎しと思ふ心から怪我
過にもならふがそのをも言はず
投返す、人に見せじと手に取上げ戻
すさへ手にふれたりと思ふにぞ我ふ
みなから捨も置れずくごうば言はぬ
よい返事聞まではくごいてくくご

き拔天下を立ふごふせふ共儘な師直
搦谷を生ふご殺そふ共かほよの心た
つた一つ何んごそふでは有まいかご
聞にかほよが返答も涙ぐみたる斗
りなり、折から來合はす若狹之助例
の非道と見て取氣轉かほよ殿まだ退
出なされぬかお暇の出で隙取は却つ
上への恐れ早お歸りご追立れば、き
やつ扱はけさりしと弱味をくはぬ高
野師直ヤア又しても言はれぬ出過ぎ
立てよければ身も立たす此度の役目
首尾よふ勤めさせくれよ搦谷の内
證かほよの頼みそふなくてはかなは
ぬ管大名でさへあの通り小身者に捨
知行誰か陸で取らす師直も口一つ
で五器提ふも知れぬあぶない身代夫
でも武士と思ふじやまでと邪魔の返
報にくて口、くはつごせき立若狹之

助刀の鯉口碎る程握り詰は詰たれ共
神前なり御前なりご一旦の堪忍も今
一言り生死の詞の先手還御ご御先
を拂ふ聲々に詮方なくも期を延す無
念は胸に忘れられず、悪事悖て運強く
切れぬ高野師直を、あすは我身の敵
共知ぬ搦谷が後押へ直義公は悠々ご
歩御成賜ふ御威勢、人の兜の龍頭御
藏に入る數にも四十七字のいろは分
かなの兜を和らげて兜頭巾のほころ
びぬ國の控ご久方の

(床本) 殿中刃傷の段

脇能過て御樂屋に鼓の調べ太鼓の音
天下泰平繁昌の壽祝ふ直義公御機
嫌斜ならざりける。若狹之助は兼て
待つ師直遅しと御殿の内奥を窮ふ長
袴の紐しめくくり氣配し儕師直眞ッ

殿中及傷の段

切 豊竹駒太夫

竹澤團 六

人形

- 桃井若狹之助 吉田光之助
- 高野師直 桐竹門造
- 茶道珍才 吉田榮三郎
- 壺谷判官 吉田玉松
- 加古川本藏 吉田玉次郎
- 大名 大ぜい

二つと刀の鯉口息を詰め待つ共知らぬ師直主従遠目に見付け是は若狹之助殿扱々お早い御登城イヤハヤ家折りました。我等閉口イヤ閉口序に貴殿に言譯致しお詫申事有るさ兩腰ぐはらりご投出し若狹の助殿改めて申さればならぬ一通り日外鵜ケ岡で拙者が申した過言チお腹お立つたで有ふる尤じやがそこをお詫、其時はごふやらした詞の間違ひでつい申た我等一生の寵忽武士がコレ手をさげる眞びらく假令其元が物馴れたお人なりやこそ外々の狼藉者で見さつしやれ。此師直眞ツ二つこはやく有やうが其節貴殿の後かげ手を合して拜ましたアハハハ一年寄るさやくたいく年にめんじて御免くコレサく武士が刀を投

げ出し手を合す。是程に申すのを聞入れぬ貴殿でもないばさ。さかく幾重にも誤りく伴内さもくにお詫く金言はする追躰は夢にもしらぬ若狹之助力きみし腕も拍手抜今さら抜に抜かれもせず寝又合はせし刀の手前さしうつむきし思案顔小柴のかけには本藏の腹もせずまもり居る。ナニ件内此壺谷はなげ遅い若狹之助殿さばきつい違ひ扱々不行儀者、今において煩出しせぬ主が主なれば家老で候迎諸事に細心のつくやつが一人もないイヤム若狹之助殿御前へ御供致そうサアお立ちなされ、サアサア師直め誤つておるぞコリヤ爰な粹めく粹様めイヤ若狹之助最前からちご心悪ふござるマア先へ何とさしたく腹痛かコレサ件内

お脊／＼お薬進じよかなイヤ／＼それ程にもござらぬ然らば少しの内お寛御前の首尾は我等がよい様に申し上る、件内一間へお供申せ、ご主従寄つてお聲に迷惑ながら若狭の助是はご思へご是非なくも奥の一間へ入りければア、もふ樂じやご本藏は天を拜し地を拜しお次の間にぞ控へ居る。程もあらさず壙谷判官御前へ通る長廊下師直呼びかけ遅し／＼何ぞ心得てござる、今日は正七ツ時ご先刻から申し渡したでないか成程遅なかりしは不調法、去りなむら御前へ出るはまだ間もあらんと、袂より文箱取出し最前手の家來が貴公へお渡し申くれよ、即奥かほよ方より参りしと渡せば受取成程／＼イヤ其元の御内室は扱々心懸かござる

は手前が和歌の道に心を寄するを聞き添削を頼むと有る定て其事ならんご押開きさなきだにおもきが上のさよ衣我つまならぬつまな重れそハア是は新古今の歌此古歌に添削ごはムい／＼ご思案の内我戀の叶はぬ證據は夫に打ち明しご思ふ怒をさあらぬ顔判官殿此歌御らふじたてござらふイヤ只今見ましたム、手前が讀のむいかにも、アノ貴戀の奥方はきつい貞女でござる。ちよつご遣はさるゝ歌は是じや、つまならぬつまな重れそアノ貞女／＼ア、其元はあやかり者登城も遅なかる筈の事、内に斗りへがり付てござるによつて御前の方はお構ないじやご當こする雑言過言あちらの喧嘩の門違ひと判官さら合點行かすむつとせしむ押しづめハ

い／＼ハー／＼コレハ／＼師直殿には御酒機嫌か、御酒参つたの、いつもらじやつた、イヤいつ呑ました御酒下されても呑いでも勤る所はきつご勤る、貴公はなぜ遅かつたの御酒参つたか、イヤ内にへがり付いてござつたか、貴殿より若狭の助殿ア、格別勤られます、イヤ又其元の奥方は貞女さいひ御器量ご申手跡は見事御自慢なされむつごなされなうそはなはさ、今日御前にはお取込み手前逆も同前、其中へ鼻毛らしいイヤ是は手前も奥が歌でござる。それ程内が大切なら御出御無用惣体貴様のやうな内に斗り居る者も井戸の鮎たさいふ喻か有、これや後學のため聞て置かしゃい、彼の鮎めがわづが三尺か四尺の井の中を天にも地にもない様

裏門の段

竹本相生太夫
鶴澤友衛門
豊竹清二郎
鶴澤呂太夫
豊澤仙太夫
豊澤糸

人形

早野勘平 吉田榮三
腰元おかる 吉田文五郎
鷺坂伴内 桐竹紋十郎
取巻 大ぜい

に思ふて不斷外を見る事がない所に
彼井戸がへに釣瓶に付てあひります
それを川へ放しやるも何かが内に斗り
居るやつじやによつて、悦んで途を
失ひ彼方の橋板では鼻柱をびしやり
又此方の橋板では鼻柱をびしやりに
びりくくくく死にまするサ彼
の鮎めも鮎も貴様が貴様が鮎が鮎よ
く、貴様も丁も鮎も同じ事ハハハハ
、鮎だ、鮎士だウと出ほうだい
判官腹にすへかれこりやこなた狂氣
めさつたかイヤ氣が違ふたか師直ム
ヤこいつ武士を捕へて氣違ひさしは出
頭第一武藏守高野師直ム、すりや先
方よりの悪言はおみや本性よな、く
どい、又本性なりやどふするチ、
かうすると抜討ちにまつこうへ切り
付くる眉間の大疵是はと怯む身のか

はし烏帽子の頭二つに切り又切りか
ゝるを抜けつくかりつ逃廻る折りも
有れお次に控へし本藏走出て押しこ
いめコレ判官様御短慮と抱こむる其
隙に師直は館をさしてこけつ轉びつ
逃行けば儂れ師直眞二つ放せ本藏放
しやれとせり合内館も俄に騒出し家
中の諸武士大小名押へて刀もぎ取る
やら師直を介抱やら上を下へこ。

(床本) 裏門の段

立騒ぐ表御門裏御門兩方打たる館の
騒動提灯ひらめく大騒ぎ早野勘平う
ろく眼走歸つて裏御門砕けよ破よ
と打た、き大聲上墟谷判官の御内早
野勘平主人の安否心もさなし爰明け
てたへ早くく、こ呼はつたり門内よ
りも聲高に御用有らば表へ廻れ爰は

裏門成る程裏門合點表御門は家中の大勢早馬にて寄付かれず喧嘩の様子は何んぞく喧嘩の次第相濟んだ出つ頭の師直様へ慮外致せし科によつて榎谷判官は閉門仰せ付けられ網乗物にてたつた今歸られしと聞くよりハアなむ三寶おやしきへぞ走りかゝつてイヤくく閉門ならば館へは猶歸られじと行きつ戻りつ思案最中腰元おかる道にてはぐれヤア勘平殿様子は残らず聞きました。コリヤ何んぞせふぞふせふぞ取付き歎くを取て突退エーめるくさほへ煩コリヤ勘平が武士は捨つたばやいもふ是迄さ刀の柄コレ待つてくだされコリヤ狼狽か勘平殿チーうるたへた是が狼狽に居られふか主人一生懸命の場にも有合せず剥へ四人同然の

網乗物お屋敷は閉門其家來は色にふけり御供にはすれしと人中へ兩腰さして出られふか爰を放せマ、待つて下さんせ尤じや道理ぢやがそのうらたへ武士には誰がした。皆わしが心から死ぬる道ならお前より私が先へ死なねばならぬ今お前が死んだらば誰が侍じやと譽ます。爰をさつくりと聞譯けて私が親里へまづきて下さんせと様もか、様も在所でこそあれ頼もしい人もふかう成た因果ぢやと思ふて女房のいふ事も聞いて下され勘平殿さわつと斗りに泣しづむ、そふじやもつこもそちは新參なれば委細の事は得しるまい。お家の執權大星由良の助殿はまだ本國より歸られず歸國を待つてお詫びせんサア一時なり共急がんと身拵へ

する所へ驚坂内家來引連れかけ出ヤア勘平うぬが主人判官師直様へ慮外を働きかすり疵負せし科によつて屋敷は閉門追付け首が飛は知れた事サア腕廻せつれ歸つてなぶり切りかくがひるげさひしめけばよい所へ驚坂内内儂れ一羽で喰ひたらねぞ勘平が腕の細れぶか料理榎梅くみて見よイヤ物ないはすな家來共畏まつたさ兩方より捕つたさかいるをまつかせさかいくやり兩手に兩腕捻じ上げつしくさ蹴かへせばかはつて切り込む切つ先を刀の鞘にて丁ぞうけ追つてくるを襦さ柄にてのつけにそらし四人一所に切りかゝるを右さ左りへ一時に田樂返しにばたくく行く後へちすへられ皆々ちりく行く後へ件内いらつて切りかゝる立はづしそ

扇ヶ谷の段

切 豊竹 古鞆太夫
鶴澤 友次郎

人形

諸	大星	鹽谷	薬師寺	石堂	斧	原	顔世
士	由良之助	判官	治郎左衛門	右馬之丞	九太夫	郷右衛門	御前
大	吉田	吉田	吉田	吉田	旗竹門	吉田	吉田
士	田榮	玉	玉	玉	門	小兵	扇太郎
大	三	松	市	幸	造	吉	太郎
士							

つ首握り大地へどうさもんどり打たせしつかま踏付けサアどうせふさこつちの儘突ふか切りふかなぶり殺しと振上る刀に縋つてコレくそいつ殺すとお詫の邪覺もふよいわいなと留る間に足の下をばこそく尻に尾のない鷲坂は命からく逃て行くエ、残念く去りながらきやつをばらせば不忠の不忠一先づ夫婦も身を隠し時節を待つて駈ふて見ん最早明け六ツ東がしらむ横雲にれぐらを離れ飛からすかはいくの女夫づれ道は急げと後へ引く主人の御身いかぞと案じ行こそ浮世なれ……。

(床本) 扇ヶ谷の段

をさめめ事嚴重に見へけりかゝる折にも花やかに奥は媚く女中の遊び御臺所かほよ御前お傍には大星力彌殿の御氣を慰めんさ鎌倉山の八重九重色々櫻花籠に生らるゝ花よりも生る人こそ花紅葉柳の間の廟下を傳ひ諸士頭原郷右衛門後に續いて斧九太夫是はく力彌殿早い御出任イヤ某も本國より親共が参る迄晝夜相詰め罷りたるそれは御奇特千萬と郷右衛門兩手をつき今日殿の御機嫌はいかお渡り遊ばさるゝと申し上ぐればかほよ御前チ二人共太儀く此度は判官様お氣詰りに思し召おしつらひでも出よふかご案じたさは格別明暮築山の花さかり御らふじて御機嫌のよいお顔はせ夫故に自もお慰に指上げふさ名有る櫻を取寄せて見やる

通りの花拵(はなごしら)へア、いか様(やう)にも仰(おほ)せの
通り花(はな)は開(ひら)く物(もの)なれば御門(ごもん)も開(ひら)き閉(し)
門(もん)を御赦(ごゆる)さるゝ吉事(きちじ)の御趣向(ごしゆう)拙者(せつしや)も
何(なに)がなぞ存(ぞん)ずれどかやうな事(こと)の思(おも)ひ
付きは無調法(むてうぽう)なる郷右衛門(ごうえもん)ヤア肝心(かんじん)
の事(こと)申し上(あ)り今日(こんにち)御上使(ごじやうし)のお出(い)で承(ま)
はりしむ定(ま)めて殿(どの)の御閉門(ごへいもん)を御赦(ごゆる)さ
るゝ御上使(ごじやうし)ならん何(なん)んと九太夫殿(くわだゆうどの)そ
ふは思(おも)し召(め)されぬかハ、い、い、コレ
郷右衛門殿(ごうえもんどの)此花(こゝの花)さいふ物(もの)も當分(とうぶん)人の
目(め)を悦(よろこ)ばず斗り風(たうりかぜ)が吹(ふ)けば散(ち)り失(う)せ
こなたの詞(ことば)もまづ其(その)如(ごと)く人の心(こゝろ)を悦(よろこ)
ばさむ逆武士(さかぶし)に似合(にあ)はぬ、いらりくら
りさ後(のち)かららげける正月詞(しょうげうし)なせぞお
やれ此度殿(このたびのどの)の御越度(ごえつど)は響應(びやうおう)の御役儀(ごやくぎ)
を蒙(かう)りならむ執事(しつじ)たる人(ひと)に手(て)を負(お)せ
館(たて)を騒(さわ)せし科輕(かき)ふて流罪(りゆうざい)重(おも)ふて切腹(せきはら)
じたい又師直公(またしりちこう)に敵對(てきたい)は殿(どの)の御不覺(ごふかく)

と聞きもあへず郷右衛門(ごうえもん)扱(あつか)は其方殿(そのほうどの)
の流罪切腹(りゆうざいせきはら)を願(ねが)はるゝかイヤ願(ねが)ひは
致(いた)されど詞(ことば)をかざらず眞實(しんじつ)を申(ま)のじ
やもとをいへば郷右衛門殿(ごうえもんどの)こなたの
悋惜(りんじやく)しはざからおこつた事金銀(ことざんぎん)を以(も)
て煩(わづ)をばり召(め)さるればか様な事(こと)は出
來(き)申(ま)さぬご己(おの)ご心(こゝろ)に引當(ひきあ)て、慾面打(よくめんうち)
けす郷右衛門人(ごうえもんひと)に媚諂(めいせん)ふは侍(さむらい)でない
武士(ぶし)でないナフ力彌殿(りきやどの)何(なん)とさそふで
は有(あ)るまいかと詞(ことば)の角(かく)をなだむる御
臺(たい)二人(ふたり)共に争(あ)ひ無用(むよう)今度(こんど)夫(つま)の御難儀(ごなんぎ)
なさるゝ元(もと)の發(は)りは此(こゝ)かほよ日外鶴(にっげつづる)
ヶ岡(かか)で響應(びやうおう)の折(おり)から道知(みちち)らずの師直(しりち)
主(ぬし)の有(あ)る自(みづか)に無体(むたい)な戀(こゝろ)をいひかけさ
ま、く、とくごきしむ恥(は)をあたへ懲(こ)り
せんさ判官様(はんがんさま)にもしらす歌(うた)の點(てん)
事(こと)奇(あ)さまよ衣(え)の歌(うた)を書(か)き恥(は)しめてやつ
たれば戀(こゝろ)の叶(かな)はぬ意趣(いしゆ)ばらしに判官(はんがん)

様に悪口元(あくぐちもと)より短氣(たんき)なお生(な)れ付(つ)得(と)堪(た)
忍(しの)ばされぬは道理(みちり)でないかいのこ
語り賜(たま)へば郷右衛門力彌(ごうえもんりきや)も俱(とも)に御主(ごしゆ)
君(きみ)の御憤(ごいきり)りを察(さ)し入(い)心(こゝろ)外面(ぐわいめん)に現(あら)はせ
り早御上使(はやごじやうし)の御出(ごい)で、玄關(げんくわん)廣間(ひろま)ひしめ
けば奥(おく)へかこく通(と)じさせ御臺所(ごたいどころ)も座
を下(くだ)り三人(さんにん)出向(いっせ)ふ間(ま)もなく入(い)る上
使(し)は石堂右馬之丞師直(いしどうえうまのぢやうしりち)が昵近(じつじん)藥師寺(やくしじ)
治郎左衛門(ぢやうざゑもん)役目(やくめ)なれば罷(か)り通(と)るご會
釋(しやく)もなく上座(じやうざ)に着(き)れば一間(いっけん)の内(うち)より
鹽谷判官(えんやはんがん)しづん、ご立出(たちいで)是(こゝ)は、御
上使(じやうし)と有(あ)つて石堂殿(いしどうどの)御苦勞(ごくろう)千萬(まん)先(ま)づお
盃(さかづき)を用意(ようい)せよ御上使(ごじやうし)の趣承(しゆじやう)はりい
づれもご一ツ(ひとつ)献酌(けんしやく)積(た)つを暗(か)し申(ま)さ
んナ、それよふござる藥師寺(やくしじ)もお聞(き)
致(いた)さふ。したが上意(じやうい)を聞(き)かれたら酒(さけ)
も咽喉(のど)へは通(と)るまいとあざ笑(あざわら)へば右
馬之丞(えびすぢやう)我(われ)々(々々)今日(こんにち)上使(じやうし)に立(た)つたる其趣(そのしゆ)

具に承知せられよ。懐中より御書取出し、押ひらけば判官も席をあらため承る。其文言此度、壺谷判官高定私の宿意をもつて、執事高野師直を及傷に及び箱を蹶せし科によつて、國郡を没收し、切腹申し付けける者なげ。聞よりはつと驚く御臺並居る諸士と顔見合せ、河れ果たる斗なり判官動する氣色もなく御上意の趣き委細承知仕る扱。これからは各の御苦勞休めに打ちくつるいで御酒一つコレ、判官だまり召され其方が今度の科はし、しり首にも及ぶべき所お上の慈悲を以て、切腹仰付けらるゝを有りむたふ思ひ早速用意もすべき筈殊に以て切腹には定つた法の有る物それに何んぞや當世様の長羽織をべら、くさしらるゝは酒興か、但し血迷ふたか、上使に立つ

たる石堂殿此薬師寺へ不作法さきめつくれば、にっこ笑ひ此判官酒興もせず血迷もせず今日上使と聞くよりも斯あらん、二期したるゆへ兼ての覺悟見すべし、大小羽織を脱捨てれば下には用意の白小袖無紋の上下死装束皆々、是は驚け、ば薬師寺は言句も出ず顔ふくらして閉口す。右馬の成さしよつて御心底察し入、則ち拙者檢使の役心しづかに御覺悟ア、御深切忝なし、そも及傷に及びしより斯あらん兼ての覺悟ア、うらむらくは箱にて加古川本藏に抱き留られ師直を討もらし、無念骨髓に通つて忘れむたし、湊川にて楠正成、最期の一念によつて生を引くさいひし、如く生れかけり死かはり、鬱憤を暗らさん、怒りの聲も諸共にお次の襖打ちたく、き一家中の

者共殿の御存生に御尊顔を拜したき願ひ、御前へ推參致さんや、郷右衛門殿お取次、家中の聲に聞ゆれば、郷右衛門御前に向ひ、いがいは、からひ候はん、フリ尤なる願ひなれ共、由良之助も參る迄、無用、はつと、斗り一間に向ひ聞かる、通り、の御意なれば、一人も叶わぬ、諸士は返す詞もなく、一問もひつ、そこしづまりける。力彌御意を承り兼て用意の腹切刀御前に直すれば、心靜に肩衣取り退座をくつる、コレ、脚檢使御見届け下さるべし、三方引きよせ、九寸五分押戴き、力彌、ハ、ハ、ハ、由良之助は、未參上仕りませぬ、フウア、存生に對面せず、残念力彌、由良之助は、テ、残り多や、な、是非に及ばぬ、是迄、ミ、逆手に取り、直し、弓手に突き立、引き廻はす、御臺二

た目と見もやらず口に稱名目に涙廊
下の襖踏開きかけ込大星由良之助主
君の有様見るよりもハハはつと斗り
にごふと伏す後に續いて千崎矢間其
外の一家中ばら／＼とかけ入たり國
家老大星由良之助只今當着仕りま
した。ナニ國家老大星由良之助とな
ア／＼くるしうない近うハア近うハア
ア近う／＼／＼ハア／＼ハア／＼ハア
ヤレ由良之助待兼たはやいハア御存
生の御尊顔を拜し身に取て何程かチ
、我も満足／＼定めて仔細聞たであ
る聞たか／＼エ、無念口惜いこのやい
ハ／＼アイヤ委細承知仕る此期に
及び申し上る詞もなし只御最後の尋
常を願はしう存じます。チ、いふ
にや及ぶと諸手をかけぐつ／＼と引
廻はし苦しき息をほつとつき由良之

助此九寸五分は汝へ笹ナハハ我豈
憤を晴らさせよと切つ先きにてふふ
勿切り血刀抜出しうつぶせにどうと
轉び息絶れば御臺を始め並居る家中
眼を閉息を詰め齒をくひしざり控ゆ
れば由良之助にじり寄り刀取上げ押
し戴き血に染る切先を打ち守り／＼
拳を握り無念の涙はら／＼／＼判官
の末期の一句五臟六腑にしみ渡り扱
こそ末世に大星が忠臣義心の名を上
げし根ざしは斯くさしられけり薬師
寺はつゝ立ち上り判官がくたばるか
らは早／＼屋敷を明け渡せイヤさば
言れな薬師寺いは／＼一國一城の主ヤ
ナニ旁々葬々の規式取りまかなひ心靜
に立退れよ此石堂は檢使の役目切腹
を見届けたれば此旨を言上せんナニ
由良之助殿御愁傷察し入る用事有ら

ば承ばらんかならず心おかれなさ
並居る諸士に目禮し悠々として立歸
る。此薬師寺も死骸片付ける其間奥
の間で休息せふ、家來參れと呼びし
家中共むら／＼と道具門前へほり出
せ判官が所持の道具俄浪人にまげら
れなさ館の四方をれめ廻し一間の内
へ入にける。御臺はわつと聲を上げ
も／＼武士の身の上程悲しい物の有
るべきか今夫の御最後にいゝたい事
は山々なれど未練なご御上使のさげ
しみの恥かしさに今迄こらへて居た
はいのいさをしの有様や亡骸に抱
き付前後もわかず泣賜ふ力瀾參れ御
臺所諸共亡君の御骸を御菩提所光明
寺へ早々送り奉れ由良之助も後よ
り追付き葬々の規式取り行はん堀矢
間小寺間其外の一家中道のけいご致

山崎街道の段

豊鶴鶴竹鶴野
 竹澤澤澤澤竹
 富友寛文友吉
 太 太
 平夫市夫左

されよご詞の下より御乗物手昇にか
 きすへ戸を開き皆立ち寄つて御死骸
 涙と俱に乗せ奉りしづぐさかき
 上ぐれば御臺所は正体なく歎き賜ふ
 を慰めて諸士のめんく我れ一ご御
 乗物に引添く御菩提。

(床本) 山崎街道の段

鷹は死しても穂はつまずさ譬にもれ
 す入る月や日敷も積る山崎の邊りに
 近き住居早野勤平若氣の誤り世渡
 るもさでほそ道傳ひ此山中の鹿猿を
 打つて商ふ種が嶋も用意に持つや袂
 まで鐵砲雨のしだらでん誰水無月と
 白雨の晴間を爰に松のかげ向ふより
 來る小提灯これもむかしは弓張のさ
 もしび消しぬらざしと合羽の襪に大
 雨を凌いで急ぐ夜の道イヤ申く卒

爾ながら火を一つ御無心と立寄れば
 旅人もちやくさ身がまへしム此街
 道は不用心とすつて合點の一人旅見
 れば飛道具の一と口商ひるこそはが
 さじ出なをせさびくと動かば一討と
 眼を配ればイヤサ成程盜賊そのお目
 違ひ御尤千萬我等は此邊りの狩人
 なるが先き程の大雨にはくちもしめ
 り難儀至極サア鐵砲それへお渡し申
 す自身に火を附御借と他事なき詞顔
 付きをきつと眺て和殿は早野勤平な
 らすやさいふ貴殿は千崎彌五郎これ
 は堅固で御無事でさ絶て久しき對面
 に主人の御家没落の胸に忘れぬ無念
 の思ひ互に拳をにぎり合勤平は指う
 つむき暫し詞もなかりしがエ、面目
 もなき我が身の上古朋輩の貴殿にも
 顔も得上げぬ此仕合せ武士の冥加に

つきたるが殿判官公の御供先きお家の大事起りしは是非に及びぬ我不運其境にも有り合はせず御屋敷へは歸られず所詮ん時節を待つて御託と思ひの外御切腹なむ三寶皆師直めがなす業せめて冥途の御供さ刀に手はかけたれど何を手柄に御供さの煩さげて言ひ譯せん心ななく折から密に様子を承れば由良殿御親子郷右衛門殿を始めとして故殿の憤散ぜん爲寄り／＼の思召し立ち有るこの噂我等迎も御勘當の身さいふでもなし手がかり求め由良殿に對面さげ御企の連判に御加へくださるば生々世々の面目貴殿に逢もうごんげの花を咲かせて侍の一分立てゝ賜はれかし古朋輩のよしみ武士の情お頼み申すこ兩手を突先非を悔し男

泣き理せめて不便なる彌五郎も朋輩の悔道理と思へども大事むさ明さじこコレサ／＼勘平はて扱お手前は身の言譯にさりまげて御企てのイヤ連判なごは何の噂ござ左やうな噂かつてなし某は由良殿より郷右衛門殿へ急の使ひ先君の御廟所へ御石碑を建立せんこの催し併我々連も浪人の身の上これこそ摺谷判官の御石塔さ末の世迄も人の口の端にかゝる物故御用金を集る其御使先君の御恩を思ふ人を撰り出す爲わざ大事を明されず先君の御恩を思はしな合點か／＼と石碑になぞらへ大星の工みをよそにしらせしげに朋輩のよしみなりハア忝い彌五郎殿成程石碑さいひ立て御用金の御拵へ有る事とつくに承り及び某も何ぞ

ぞして用金を調へそれを力に御託さ心は千々に砕けども彌五郎殿恥かしや主人の御罰で今此ざま誰にかうこの便りもなしされ共がるが親與一兵衛さ申すはたのもししい百姓我々夫婦判官様へ不奉公さ悔み歎き何ぞぞして元の武士に立ちかへれさおちうばさにも歎き悲しむ是幸御邊に逢し物語り段々の仔細を語り元の武士に立ちかへるさいひ聞かさば纒かの田地も我子の爲め何しにいなばるもいはじ御用金を手びりに郷右衛門殿迄お取次入頼み存するさ餘儀なき詞にム、成程然らばこれより郷右衛門殿迄右の譯をも咄し由良殿へ願ふて見ん明々日はかならずきつご御返事則ち郷右衛門殿の旅宿の所書さ渡せば取つて押戴き重々の御世話忝

二ツ玉の段

竹本大隅太夫

鶴澤道八

胡弓

鶴澤綱治
鶴澤友太郎

人形

早野勘平 吉田榮三

千崎彌五郎 桐竹政龜

斧定九郎 吉田玉幸

百姓 與市兵衛 吉田小兵吉

し何ぞぞ急に御用金をこしらへ明々
日お目にかゝらん 其れが有り家お尋
ねあらば此山崎の涉場を左りへ取り
與一兵衛とお尋ね有らば早速相しれ
申べし夜更ぬ内に早くも御出コレ此
行く先きは猶物騒随分ぬかるな合點
く石碑成就する迄は蚤にも喰さぬ
此からだ御邊も堅固で御用金の便を
待つぞさらばくさ兩方へ立別れて
ぞ

(床本) 二ツ玉の段

急ぎ行く又もふりくる雨のあし人の
足音さばく道は闇路に迷はれたる
子故の闇につく杖もすぐ成る心聖親
仁一筋道の後ろからチーイ親仁
殿よい道づれさ呼ばいつて斧九大夫
が悴定九郎身の置き所しら涙や此街

道の夜働きたんびら物を落しざしき
つきにから呼ぶ聲が貴様の耳へはい
らぬか此ぶつそな街道をよい年を
して大膽く連にならふさ向ふへ廻
りきよる付く目玉ぞつせしむ遠は
老人是はくお若いに似ぬ御奇特な
私もよい年をして一人旅はいやなれ
どサアいづくの浦でも金程大切なも
のはない去年の年貢つにまり此中か
ら一家中の在所へ無心に居たれば是
もびたひらなり才覚ならず埒のあか
ぬ所に長居はならずすこく一人戻
る道と半分言はさすヤヤかましいあ
り様が年貢の納まらぬ其相談を聞き
にはこぬコレ親仁殿おれが言ふ事を
さくさ聞かしやれやアいかうじやは
こなたの懐ろに金なら四五拾兩のか
さ縞の財布に有るのをとつくりと見

付けてきたのじや借して下だされ男
が手を合はす定めて貴様も何んぞ詰
らぬことか子が難儀に及ぶによつて
と言ふ様な有る格な事じや有うけれ
どおれも身込んだらハテしよ事ごな
いと諦めて借て下され〜と懐〜を
を指入引きすり出す縞の財布ア、申
しそれは〜とは是程爰に有る物さ
ひつたくる手にすまり付きイエ〜
此財布は後の在所で草鞋買ふ辻端錢
を出しましたが後に残るは晝食の握
り飯くはく亂せんようにご娘かくれ
た和中散反魂丹でございますお救し
なされて下さりませとひつたくり逃
げ行く先きへ立ち廻りエ、聞き分の
ないむごい料理するがいやさに手ぬ
るふいへば付き上がるサア其金爰へ
まき出せ遅いさたつた一討さ二尺八

寸おがみうちなふ悲しやさいふ間も
なくから竹はりき切り付くる刀の廻
りか手の廻りかはづれる抜き身を兩
手にしつかご握み付きごふでもこな
た殺さしやるのチ、知れた事金の有
るのを見てするしごごごごはかす
まごたばれき肝先へさし付くればマ
〜、〜、まあ待つて下さりませハア
ぜひに及ばぬ成程〜是は金でござ
りますすけれ共此金は私がつ一人
の娘もござる其娘も命にもかへぬ大
事の男もござりまする其男のために
入る金ち譯有る事ゆへ浪人して居
まする娘が申しますにはあのお人の
浪人も元はわしゆへ何ぞぞして元の
武士にしてしんぜたい〜ご嬢さわ
しごへ毎夜さ頼みア、身賃にはござ
りまするごうもしがくの仕様もなく

ばやこいろ〜談合して娘にも呑込
ませ紳へは必ず沙汰なしとしめし合
はせほんに〜親子三人が血の涙の
流れる金それをお前に取られて娘は
何んさなりませふコレ拜みます助け
て下さりませおまへもお侍の果そふ
なが武士は相身互ひ此金がなければ
娘も紳も人様に顔が出されぬたつた
一人の娘につれそふ紳ぢや者不便に
ござる可愛ござる了簡してお助け
なされて下さりませエ、お前はお
若いによつてまだお子もござるまい
がやんがつてお子を持つて御らうじ
ませ親仁がいとおつたは尤じやご
思し召して此場を助さしやつて下さ
りませ、マア一里行ば私わ在所金を
紳に渡してから殺されましょ申〜
娘も悦ぶ顔見てから死たうござりま

身賣りの段

竹本相生太夫
 鶴澤芳之助
 鶴澤綱右衛門
 豊竹呂太夫
 豊竹仙太夫
 豊澤仙糸

人形

與市兵衛 女房 吉田玉七
 娘 おかる 吉田文五郎
 一文字屋才兵衛 桐竹政龜
 早野勘平 吉田榮三

すこれ申ア、あれくく、と呼はれ
 〆後先き遠く山びこの御に哀れ催せ
 リチ、悲しいこつちやばまつと、こ
 ぼへヤイ老ばれめ其金でおれが出世
 すりや其めぐみでうぬがせがれも出
 世するはやい人に慈悲すりやわるふ
 はむくはぬア、可愛やさぐつこつく
 うんさ手足の七轉八倒のたくり廻る
 をすれにて蹴かへしチ、いさしやい
 たかるけれおれに恨みはないぞや
 金がありやこそ殺せ金がなけれやな
 んのいの金お、たきじやいさしほや
 南無阿彌陀南無妙法蓮華經ごちらへ
 なりさうせおるさ刀も抜かぬいもさ
 しゑぐり草葉も朱に置くつゆや年も
 六十四苦八苦あへなく息は絶にけり
 しすましたり三件の財布くらがり耳
 のつかみ讀ヒヤ五拾兩エ、久しぶり
 の御對面、忝しと首にひつかけ死骸
 をすぐに谷底へはれこみ蹴込ごるま
 ぶればれは我が身にかゝることもしら
 す立つたるうしろよりいつさんにく
 る手負猪、これはならぬさ身をよぎる
 かけくる猪は一文字木の根岩角ふみ
 立て蹴たて鼻いからして泥も草木も
 一まくりに飛行けばあはやと見送る
 定九郎が春ぼれをかけてごつさりご
 あばらへぬける二ツ玉うん共ぎやつ
 共いふ間もなくふすぶり返りて死た
 るは心地よくこそ見へにけれ猪打ち
 さめしご勘平は鐵砲ひつさげ爰かし
 こさぐり廻りて扱こそ引れば猪
 にはあらずヤア、こりや人ぢやな
 む三寶仕損じたりと思へごくらさ眞
 の闇誰人なるぞと問れもせずまた息
 あらんご抱起せば手に當る金財布つ

かんで見れば四五拾兩天のあたへさ
押しいたゞきん、猪より先きへ逸散
に飛かごさくに急ぎける。

(床本) 身賣りの段

みさき踊りがしゆんだる程に親仁出
て見やば、んつば、んつれて親仁出
て見やば、んつ參かつ音ぞ在所歌所
も名におふ山崎の小百姓與市兵衛が
植生の住家今は早野勘平む浪々の身
の隠れ里女房おかるは寢亂れし髮取
り上ん、櫛箱のあかつきかけて戻ら
ぬ夫待つ間もさけし投島田結ふにい
はれぬ身の上を誰にかつげの水櫛に
髪の色艶すきかへししなよくしやん
と結立てしは在所におしき姿なり母
の齡も杖つきの野道さぼく立歸り
チ、娘髪結やつたか美しうよふ出来

たイヤもう在所はごこもかも參秋時
分でいそがしい今も數際で若い衆が
麥かつ歌に親仁出て見やば、んつれ
てさ諷ふを聞き親父殿の遅いが氣に
か、り口迄往たれごよなふ影も
かたちも見へぬさいなこれやまあど
ふして遅い事じやわし一走り見て來
やんしよイヤなふ若い女の一人ある
くはいらぬ事殊にそなたはちいさい
時から在所をあるく事さへ嫌ひで搥
谷樓へ御奉公にやつたれご、ふでも
草深い所に縁があるやら戻りやつた
が勘平殿と二人居やればおさましい
顔も出ぬチ、か、様のそりや知れた
事すいた男と添のぢやもの在所はお
ろか貧しいくらしても苦にならぬや
ん、て盆に成つてさま出で見やか
んつつか、んつれてさいふ歌の通り

勘平殿さたつた二人踊見にいきやん
しよ、お前も若い時覺わあるさまし
合いくらぬぐはら娘氣もわさく、こ
見へにける。何ぼ其やうに面白おか
しういやつても心の中はのイエ、
濟でござんすぬしのために祇園町へ
勤奉公に行くは兼て覺悟の前なれご
年寄つてさ、様の世話やかしやんす
がそりやいやんな少進物なれご兄も
搥谷の御家來なれば外の世話するや
うにもないご親子咄しの中道傳ひ駕
をか、せて急ぎくるは祇園町の一文
字やエ、こつご一家二人家、爰じや
く、ご門口から與一兵衛殿内にかこ
言つ、はいれば是はまあ、遠い所
をソレ娘たばご盆お茶上ましやご親
子して植でおいへを伯人やの亭主扱
夕ア、是の親仁殿もいかい太儀、別

條なふ戻られましたかエーさては親父殿と連立つて來はなされませぬか
 是はしかりお前へいてから今においで
 てヤア戻られぬかハテめんよふなハ
 アーもし稻荷前をぶら付て彼玉殿に
 つまいりやせぬかのコレ此中爰へ見
 に來て極た通りお娘の年も丸五年切
 給銀は金百兩さらりて手を打つた是
 の親仁はいはるゝには今夜中に渡さ
 ればならぬ金有れば今晚證文を認め
 百兩の金子お借なされて下さされと涙
 をこぼしての頼み故證文の上で半金
 渡し残りば奉公人と引かへの契約何
 が其五拾兩渡すご悦んでいたゞきほ
 たゞ言ふて戻られたはもふ四ツで
 も有ふかい夜道を一人金持ていらぬ
 物と留ても聞かず留られたが但しは
 道にイエ／＼寄らしやる所はなふか

様ない共／＼殊に一時も早ふそな
 たやわしに金見せて悦ばさふ迎いき
 せき戻らしやる筈じやに合點かい
 ぬいヤコレ合點のいゝいかぬはそつ
 ちのせんさくこちばさむりの金渡し
 て奉公人連れていゝの懐より金取
 出し後金の五拾兩これで都合百兩サ
 ア渡す請さらしやれエーお前それで
 も親仁殿の戻られぬ中はなふかるわ
 がみはやられぬハテぐすん／＼と塔の
 明かぬコレぐつ共すつ共言れぬ一
 兵衛の印形證文が物いふじやて、コ
 レ證文がけふから金で買切つたから
 だ一日違へばれこづ／＼違ふごふで斯
 せさ濟まいと手を取つて引き立る、
 マア／＼待てと取付く母親突退加退
 無体に駕へ押込／＼かき上る門の口
 鐵砲に簀笠打かけもごりか／＼つて見

る勘平つか／＼ご内に入り駕の内な
 は女房共こりやマアごこへチー勘平
 殿よい所へよふ戻つて下さつたご母
 の悦び其意を得ずごふでも深い譯か
 有る母者人女房共様子聞かふご上
 の眞中ごつかごすはれば文字の亭主
 ナー扱はこなたが奉公人の御亭主じ
 やの、たごへ夫でも何んでも言號の
 夫なご、脇より違亂妨げ申す者無之
 候と親仁の印形あるからはごちには
 構はぬ早ふ奉公人を受取ふチー御殿
 合點がいくまい兼てこなたに金の入
 る様子娘の咄しで聞た故ごふぞ調へ
 て進んぜたいさいふた斗りで一錢の
 宛もなしとて親父殿の言しやるに
 はひよつごこなたの氣に女房賣つて
 金調やうごよもや思ふでやは有る
 まいけれどもし二親の手前を遠慮し

て居やしやるまい物でもないいつそ
此興一兵衛が駕殿にいらさす娘を賣
らふ、まさかの時は切り取りするも
侍のならひ女房賣つても恥にはな
らぬお主の役に立つる金調へておま
したらまんざら腹も立まいと昨日か
ら祇園町へ折り極ばめにいて今に戻
らしやれぬ故親子案じて居る中へ親
方殿が見へて夕ア親父殿に半ん金渡
し後金の五拾兩と引かへに娘を連れ
て遊ふと言てなれど親父殿にあふて
の上と譯をいふても聞き入れず今連
れていなしやる所さふせふぞ勸平殿
是はく先づ以つて舅殿の心遣ひ、
忝いしたがこちにもちつこよい事
が有れ共それは追つて親仁殿も戻ら
れぬに女房共は渡されまい、さばな
ぜに、ハテいはい親なり判りたり尤

も夕ア半ん金の五拾兩渡されたでも
有ふけれどヤイこれ京大阪を股にか
け女談の嶋ほど奉公人を抱へる一文
字屋渡さぬ金を渡したといふて濟物
かいのまだ其うへに慥な事あるて
や、これの親仁が彼五拾兩と言ふ金
を手ぬぐひにくるくさまいて懐
にいれらるゝ、それやあぶない是に
入れて首にかけさつしやれさおれが
きて居る此一重物の縞のきりびこし
らへた金財布借たればやんかし首に
かけて戻られうヤア何んさこなたが
着てゐる此縞のきれの金財布がチ
てや。あの此縞じや何さ慥な證據で
有ふが。さ聞くよりはつこ勸平が肝
先にひしここたへそばあたりを目を
くばり袂の財布見合はせば寸分違は
ぬ糸入縞、なむ三寶扱は夕ア鐵砲で

打ち殺したは舅で有つたかハアはつ
と我胸板を二ツ王で打ちぬかるゝよ
りせつなき思ひさばしらすして女房
コレこちの人をばくせすさやる物
かやらぬ物が分別して下さんせチ
成程ハテもふあの様に慥に言はるゝ
からはいきやらすば成まいかアノこ
つ様に逢ひでもかへ、イヤ親父殿に
もけさちよつさあふたも戻りは知れ
まいコウそんなりやとつさんに逢ふ
てかへ夫れならそふさいひもせでか
く様にもわしにも案じさして斗りさ
言ふに文字も圖に乗つて七度尋れて
人うたがへじや親仁の有りのしれ
たのでそつちもこつちも心かよいま
だ此上にも四の五の有ればいや共に
でんご沙汰まあくさらりと濟んで
めでたいお袋も御亭主も六條参りし

勘平切腹の段

切 竹本津太夫

鶴澤綱造

人形

與市兵衛	女房	吉田玉	七
娘	おかる	吉田文五郎	
一文字屋吉才兵衛		桐竹政	龜
早野	勘平	吉田榮	三
めつぼう	彌八	吉田瓢	壽呂
種ヶ島の六		吉田文之助	
狸の角兵衛		吉田傳之助	
原	郷右衛門	吉田小兵吉	
千崎彌五郎		桐竹政	龜

てちま寄らしやれサア、駕に早うのりやアイ、コレ勘平殿もふ今あつちへ行ぞへ。年寄つた二人の親達ごふでこな様のみんな世話取わけてさつ様はきつい持病、氣を付けて下さんせと親の死目を露しらす願ふ便さいぢらしさ、いつそ打ち明け有りのま、咄さんにも他人有りさ心を痛めこたへ居るチ、鞆殿夫婦の別れ暇乞がしたかるけれどそなたに未練な氣も出よかと思ふての事有るイエ

もよいか、こば付いてけが仕やんなご駕に乗まで心を付けさらばやさらば何の因果で人並な娘を持ち此悲しいめを見る事じやさ齒をくひしげり泣きければ娘は駕にしがみ付き泣をしらさじ聞かさじと聲をも立てずむせかへる。なまきなくも駕かきあげ道をはやめて急ぎ行く。

(床本) 勘平切腹の段

何んぼ別れても主のために身を賣れば悲しうも何共ないわしやいさんで行くか、様したがご、様に逢すに行くのがチ、それも戻らしやつたらつい逢にいかしやるぞいの煩はぬ様に灸すへて息才な顔見せにきてたも鼻紙弱もなければ不自由な何んに

母は後を見送り、ア、よしなない事いふて娘も嘸悲しかるチ、こな人わいの親の身でさへ思ひ切りおよいに女房の事ぐづん、思ふて煩ふて下さんな此親父殿はまだ戻らしやれぬ事かいのふこなたあふたさ言はしやつたの、ア、成程そりやまあご、こらではしやつて何所へ別れていかしやつ

た、されば別れた其所は鳥羽が伏見か淀竹田と口から出次第めつぼう彌八種が島の六、狸の角兵衛所の狩人三人連れ親父の死骸に褰打ちきせて戸板にのせごやぐに内に入り、夜山仕舞て戻りがけ是の親父が殺されて居られた故狩人仲間も連れて來たご聞よりはつと驚く母、何者の仕業コレ駕殿殺したやつは何者じや敵を取てくだされのふコレ親父殿くとよべごさげべご其かひも泣より外的事ぞなき狹人共口々にお袋悲しから代官所へ願ふて詮議してもらはしやれ笑止くと打つて皆は我家へ立歸る。母は涙の隙よりも勘平が傍へ差よつて、コレ駕殿よもやぐに

やつたら悔りも仕やるはづ、こなた道であふた時金受取はさつしやれぬか、親父殿がなんと言れた、サアいはつしやれサア何ごさふも返事は有るまいがのな證據はコレ爰にと勘平が懐へ手を指入れて引出すはつきにちらり見て置た此財布コレ血の付いて有るからはこなたが親父を殺したのイヤそればくとさエ、わごりよはなに隠しても隠くされぬ天道様が明らかかな。親父殿を殺して取た其金にや誰にやる金ぢやム、聞へた。身貧な舅むすめ賣つた其金を中で半分くすれて置て皆やるまいかと思ふてコリヤ殺して取つたのじやな、今さいふ今迄も律義な人じやと思ふてだまされたが腹が立はいやいエ、爰な人でなし、あんまりあき

れて涙さへ出ぬわいやいなふいさしや與一兵衛殿畜生のやうな聲さは知らずごふぞ元の侍に仕てやりたいご年寄て夜も寝ず京三界をかけるき彌財を投打つて世話さしやつたも返つてこなたの身のあだご成つたるか飼かふ犬に手を喰るゝごよふもく此やうにむごたらしう殺された事ぢや迄コリヤ爰な鬼よ蛇よごさまをかへせ親父殿を生けて戻せやいと遠慮會釋もあら男のたぶさをつかんで引寄、たいき付づたく、に切りさいなんだ速是で何の腹が居よご恨の数々くごき立てかつげごふして泣ぬたる身の誤りに勘平も五體に熱湯の汗を流し疊にくひ付き天罰と思ひ知つたる折こそあれ、深編笠の侍二人早野勘平在宿をしめさるゝか、

原郷右衛門千崎彌五郎御意得たしこ
音なへば折悪けれ共勘平は腰ふさぎ
脇挟で出迎ひコレハ御兩所共に
見ぐるしき埴生へ御出忝しと頭を
さぐれば郷右衛門見れば家内に取込
みも有りそふなイヤもう些細な内證
事、おかまいなく共いざ先あれへ、
然らば左様に致さんさすつこ通り座
に付けば二人が前に兩手をつき此度
殿の御大事にはづれたるは拙者が重
々の誤り申ひらかん詞もなし、何卒
某が料御ゆるしを蒙り亡君の御年
忌諸家中諸共相勤る様に御兩所の御
執成偏に頼み奉るさ身をへりくだ
り逃ければ郷右衛門取りあへず先以
て其方貯へなき浪人の身として多く
の金子御石碑料に調進せられし段由
良之助殿甚だ感じ入れしが石碑を營

むけ亡君の御菩提殿に不忠不義をせ
し其方の金子を以て御石碑料に用ひ
られんは御尊靈の御心にも叶ふまじ
さ有つてなそれ金子は封のまゝ相戻
さるゝと詞の中より彌五郎懐中より
金子取出し勘平が前にさし置けばは
つさばかりに氣も轉動母は涙さもろ
共にコリヤ爰な悪人づら今さいふ今
親の罰思ひ知たか、皆様も聞いて下さ
れ親父殿が年寄て後生の事は思はず
鉦の爲に娘を賣金調へて戻らしやる
を待ちぶせて、あのやうに殺して
取た金じや物天道様がなくばしらす
何で御用に立つ物ぞ親殺しのいき盜
人に罰を當て下されぬは神や佛も聞
へぬあの不孝者お前方の手にかけて
なぶり殺しにして下されわしや腹が
立つわいのさ身をなげふして泣き居

たる聞くに驚き兩人刀追取つて弓手
馬手につめかけ、彌五郎聲をあら
らげヤイ勘平非義非道の金取つて身
の料の訛せよさいいはぬぞよ、わがや
うな人非人武士の道は耳に入るまい
親同然の舅を殺し金を盗だ重罪人は
大身鎧の田樂さし拙者が手料理ふる
まはんさばつたごにらめげ郷右衛門
かつしても盗泉の水を飲すこは義者
のいましめ舅を殺し取たる金亡君の
御用金になるべきか生得汝が不忠不
義の根性にて調へたる金と推察有つ
てつきもごされたる由良之助様の眼
力ほ、天晴れくさりながらハア情
けなきは此事世上に流布有つて壘谷
判官の家来早野勘平非義非道を行ひ
しさいは、コリヤ汝斗りが恥ならず
亡君の御恥辱さしらざるかこなく

くくうつけ者めなうぬ勘平
これさ勘平おみやごうした者だ左程
の事の辨なきなんじにてはなかりし
がいかなる天覽が見入しとするごき
眼に涙を浮め事を分け利をせむれば
たまり兼ねて勘平諸肌押脱脇指を抜
くより早く腹へぐつこつきたてア
いづれもの手前面目もなき仕合せ拙
者も望み叶はぬ時は切腹さ兼ての覺
悟我勇を殺せし事亡君の御恥辱と有
れば一通り申ひらかん兩人共に聞い
てたべ、夜前彌五郎殿の御目にか
り別れて歸るくらまぎれ山越猪に出
合二ッ玉にて打ち留かけよつてさぐ
り見れば猪にはあらだ旅人なむ三寶
誤つたり薬ばなきか懐中をさかし
見れば財布に入つたる此金道ならぬ
事なれ共天より我に與ふる金と直に

馳行彌五郎殿に彼金をわたし立歸つ
て様子を聞は打留たるは我勇金は女
房を賣つた金、かほど迄する事なす
事いすかのはし程違ふと言ふも武運
に盡たる勘平が身の成り行き推量有
れと血ばしる眼に無念の涙仔細を聞
くより彌五郎すん立上り死骸引上
打返しムウく疵口咬め郷右衛門
是見られよ鐵砲疵には似たれ共これ
は刀でえぐつた疵、エ、勘平早まり
しと言ふに手負も見て悔り母も驚く
斗りなり、郷右衛門心付イヤコレ干
崎股ア、是にて思ひ當つたり、御自
分も見られり通り是へ來る道端は鐵
砲疵請けたる旅人の死骸立寄り見れ
ば斧定九郎強怒な親九太夫さへ見限
つて勘當したる悪黨者、身の千な
き故に山賊すると聞いたるが疑ひも

なく勘平が勇を討たはきやつ業エ
いそんなりやあの親父殿を殺したは
外の者でござりますかへハアはつこ
母は手負に縋り寄りコレ手を合して
拜みます、年し寄の愚痴な心から恨
みいふたは皆誤りこらへ下され勘平
殿必ず死んで下さるなと泣詫れば顔
ふり上只今母の疑ひも我悪名も晴れ
たれば是をめぐの思ひ出さし後よ
り追付勇殿死手三途を伴はんと突込
刀引廻せばア、暫く思はずも其
方、勇の敵討つたるはいまだ武運に
盡ざる所、矢神の御恵にて一功立つ
たる勘平息の有る中郷右衛門が密に
見する物有り懐中より一卷を取
しさらくを押しひらき此度亡君の
敵高野師直を討取らんと神文を取
かはし一味徒黨の連判かくのごさし

祇園一力茶屋の段

由良之助 竹本津太夫
 力 彌 (竹本さの太夫 竹本津の子太夫)
 重太郎 竹本文字太夫
 喜太八 豊竹和泉太夫
 彌五郎 竹本相生太夫
 仲 居 豊竹綾太夫
 おかる 竹本土佐太夫
 仲 居 竹本浪花太夫
 同 竹本播路太夫
 亭 主 (竹本長尾太夫 竹本貴鳳太夫)
 件 内 竹本大隅太夫
 九太夫 竹本鍛太夫
 平右衛門 豊竹古靱太夫

讀も終らず苦痛の勘平其姓名は誰々成るぞやチ、徒黨の人数は四十五人汝も心底見届けたれば其方を指加へ一味の義士四十六人はをめぐりの土産にせよ懐中の矢立取出し姓名を書記し勘平これき血判心得たりと腹十文字にかき切り臍腑をつかんでしつかさ押へしサア血判仕つたア、のるなく、早野勘平重氏血判たしかに相濟んだぞエ、忝や有難や我望み達したり母人歎いて下さるな舅の最期も女房の奉公も反古にはならぬ此金一味徒黨の御用金といふに母も涙ながら財布と俱に二包二人が前に指出し勘平殿の魂の入つた此財布舞殿じやと思ふて敵討の御供につれてござつて下さりませ、チ、成程尤なりマ彌右衛門金取り納め、思へば

此金は縞の財布の紫覺黄金佛果を得よさひいければア、佛果さげからはし死ぬ、魂魄此土こままつて敵討ちの御供するといふ聲も早や四苦八苦母は涙にかきくれながらナフ勘平殿此事を娘にしらしせて死目にあはしてやりたいイヤ、親の最後は格別勘平が死だ事必ず知らして下さるなお主の爲に賣つたる女房此事聞て不奉公せば主に不忠するも同然只其まゝにさし置かれよサア思ひ置く事なしと刀の切つ先き咽喉にぐつささじつらぬきかつごふして息絶たりヤアもふ舞殿は死しやつたか扱も、世の中におれがやうな因果な者がまたさ一人有らふか親父殿は死なしやる頼みに思ふ舞を先き立ていとし可愛の娘には生き別れ

野澤吉兵衛
鶴澤綱造

人形

九	太夫	桐竹門造
伴	内	桐竹紋十郎
彌	五郎	桐竹政龜
重	太郎	吉田扇太郎
喜	多八	吉田文作
亭	主	吉田榮徳
由	良之助	吉田榮三
平	右衛門	吉田玉松
力	彌	桐竹紋太郎
お	か	吉田文五郎
仲居	おきく	桐竹紋司
同		大ぜい

年寄た此母が一人残りて是がマアなき。

んこ生きて居られふぞコレ親父殿與一兵衛殿おれも一ツ所につれて往て

くだされと、取付ては泣さけびまた立ちあがつてコレ筆殿母も俱にこす

がり付てはふししづみあちらでは泣きこちらでは泣わつとばかりにどう

ぞ伏撃をばかりに歎しは目もあてられぬ次第なり。郷右衛門つゝ立ちあ

がりア、これく老母なげかるゝはこそはりなれども勘平が最期の様子

大星殿にくはしく語り入用金手渡しせば満足あらん首にかけたる此金は

筆と舅の七々日四十九日や五十兩あはせて百兩百ヶ日の追善供養後れん

ごろにさむらはれよ、さらはさらばおさらばと見送るなみだ見かへるな

みだなみだの涙の立歸る人もはかな

(床本) 祇園一力茶屋の段

花に遊ばし祇園邊りの色揃へ東方南

方北方西方みだの淨土が塗りにぬり

立てびつかりびかく光りかややく

はくや藝子にいかな粹めも現ぬかし

てぐんごるつへくやワイく

トサ九誰を頼まふ亭主は居ぬか

亭主く亭是はいそがしいはごいつ

様じやごなた様じやヨウ斧九太夫様

御案内さばけうさいく九イヤ初め

てのお方を同道申たきつふ取込そふ

に見へるが一つ上げます座敷が有る

か亭ヤござります共く今晩は彼由良大盡の御趣向で名有る色達を掴み込み下座敷はふさがつてござりますれどちうち亭座敷が明いてございま

す九たりや又蜘蛛の巣だらけで有ふ亭又悪
口を九イヤサよい年をして女郎の蜘蛛の巣
にかゝるまい用心亭コリヤきつい下には
置かれぬ二階座敷ソレ灯を燈せ仲居共九何
んぞ件内殿由良の助が体御らうじたか件九
大夫殿ありやいつそ氣違でござる段々貴公
より御内通有つてもあれ程に有るふさは主
人師直も存ぜず拙者に罷登つて見さげ心
得ぬ事有らば早速知せよと申付ましたか扱
／＼我もへんしも折れましてござる併し悴
力彌めは何んぞ致したな九いづも折節此
處へ參り俱に故將指合いくらぬがふしぎの
一つ今晚は底の底を捜し見んご心巧みを致
して參つた密々にお咄し申さふイヤ二階へ
件先づ／＼九然らば斯お出歌じつは心に思
ひばせいであだなほれた／＼の口先はいか
いつやでは有るはいな彌五郎殿喜多八殿
是が由良之助殿の遊び茶屋一力と申のでこ

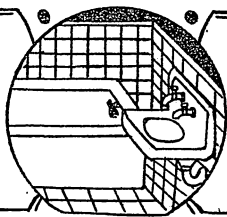
ざる重誰そちよと頼みたい仲アイ／＼ごな
た様じゃへ重アイイヤ我々は由良之助殿に用
事有つて參つた奥へ往て言ふにけ矢間重太
郎千崎彌五郎竹森喜多八でござる此間より
節に迎ひの人を遣はしますれぞお歸りのな
い故三人連で參りましたちご御相談申され
ば成らぬ儀がござる程にお逢なされて下さ
れと吃度申ておくりやれ仲夫は何ん共氣の
毒でござんす由良様は三日以來吞みつつけ
お逢なされてからたわいは有るまい本性は
ないぞへ重ハテ扱てまあそふいふておくり
やれ仲アイ／＼彌五郎ごのお聞きなされ
たか彌承はつて齋き入りました初めの程
は敵へ聞かする計略ぞ存じましたわいかふ
遊びに實に入り過ぎまして合點が參らぬ喜
何んぞ此喜多八が申た通り魂が入れ替つ
てござらふがのいつそ一間へ踏込重イヤ
／＼得と面談致した上彌成程然らば是に三

堂録 美商あめ
商標
御菓子
おかし
あめ
おこし
文楽豆
文楽せんべい
味噌せんべい
結結び昆布
銘菓珍味色々
贈用
命は命
おはは
のびは
のびは
文楽座前
文楽座前
電話六六九〇
小次権入贈形人吳文

人相待ちませふ、折に二階へ勤平が妻のお
 輕はゑいざまし早里馴れて吹風にうさを晴
 して居る所へ由ちよさいてくるぞや由良之
 助さも有る侍が大事の刀を忘れて置たつ
 い取つてくる其間に掛けものもかけ直し燼
 の炭もついで置きやアソレ〜〜こち
 らの三味線ふみおるまいぞ是はしたり九太
 はもう逝れたそふな父よ母よ泣聲聞けば
 妻にあふむのうつせし言の葉エ、何んじや
 いな置しやんせ 由 傍り見廻はし由良之助釣
 燈籠の明りを照し讀長文は御臺より敵の様
 子こま〜と女の文の後や先きら〜々では
 かごらず、餘所の戀より羨ましくおかるは
 上より見おるせば夜目遠目成り字性もおほ
 る思ひついたるのべ鏡出して寫して讀取る
 文章 下家よりは九太夫がくりおるす文月
 かげにすかし讀さは 神ならずほさけかゝ
 りしお輕もかんざしばつたり落れば 由下

には〜と見あげて後へ隠す文九太の下に
 は猶みつば 輕上には鏡の影隠し由良様が由
 おかるかそもじはそこに何してぞ 輕私しや
 お前にもりづぶされ餘りつらさに酔さまし
 風に吹かれて居るはいナ 由 ムンハテなふワ
 リヤよふ風に吹れてじやのイヤかるそもじ
 にちと咄したい事がある屋根越の天の川で
 こゝからは言はぬちよつさおりてたもらぬ
 か 輕咄したいさは頼みたい事かへ 由 マアそ
 んな物 廻つてきやんしよ 由 イヤ〜段梯
 子へおりたらば仲居が見付けて酒にせふア
 いごふせふなム、幸ひ愛に九ツ梯子是をふ
 まへておりてたもと小屋根に掛ければ 輕此
 梯子は勝手がちがふてチ、こはごふやら是
 はあぶない物 由 大事ない〜あぶないこと
 はいは昔の事三問づいまたげても赤がうや
 くもいらぬ年ばへ 輕 あほう言はんすな船に
 乗つた様でこはいはいな 由 道理で船玉様

化粧タイル
 水道衛生工事
 洗面、浴場、
 水洗便所設計
 汚水浄化装置
 特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
 新橋

岡部 商會

阪急 夙川

岡部商會支店

電話番 二六六九
 二二七六
 電話番 一九七六

見へるは輕チ、覗かんすないナ、由洞庭の秋の月様を拜み奉るじや輕イヤモウそんならおりやせぬぞへ、由おりざおろしてやる輕アレ又悪い事を、由やかましいノ、生娘か何その様に逆縁ながらさ後よりじつさだきしみ抱おろし何さそもじは御らうじたか輕ハイいへ、由見たで有、輕何じややら面白そうな文、由アノ上から皆よんだか輕チ、くご由、身の上の大事さこそは成りにけり輕何んの事じやぞいな、由何の事さはおかる古いおほれた女房になつてたもらぬか輕おかんせ嘘ぢや、由サア嘘から出た誠でなければ根がさげぬおふさいや、輕イヤいふまい由ソリヤな、輕サアお前のは嘘から出た誠ぢやない誠から出た皆うそ、由おかる輕アイ由うけ出そふ輕エ、由嘘でない證據に今宵の内に身請せふ輕ムンイヤわしには、由間夫があるならそはしてやる輕そりやマアは

んさかへ、由侍冥利三日成り共園ふたら夫れからは勝手次第輕ハア嬉しうござんすと言はして置いて笑を、由イヤ直ぐに亭主に金渡し今の間に埒さそふ氣遣ひせず待つて居や輕そんなら必ず待つて居るぞへ、由金渡してくる間どつちへも行きやるな女房じやぞ輕夫もたつた三日、由それ合點輕エ、忝ふござんす歌世にも因果な者ならわしが身でや可愛い男にいくせの思ひエ、何じやいな置しやんせ、平ア、遠は花の都の祇園町賑しい事だなア、何んさやらいつたはい入り相の鐘は廊の夜明けかなよはよくいつたはいハ、イヤそれはそうさ妹、かるが此廊へ勤め奉公致しておるぞ聞たがどぶぞあいたい物だがチ、幸ひの女中コレちよま物を尋れたいお山崎へんから此廊へ勤め奉公に来て居るか言ふ女御存じれいか知つて居ればどぶぞ致へてくれまへかな輕

劇場・頭店・輪
 用飾・内室・花
 花用・慶造・花



花六

電話南二八七三番
 大阪南區千代田町二九
 工塲・成區江片腹見町

今ま手のはなせぬ事仕て居る程に勝手もこ
 て聞いて下さんせ 平 アアそふは思つたが勝手
 元も何だかごてくさいそがしいごうぞ教
 へてくれるコレ女中 軽 エーしらぬはいな 平
 そふすげなく言はずさふぞ教へてくれる
 コレ女中くくヤアわりや 妹かるでれ
 へか 軽 ヤア兄様が恥かしい所で逢ましたこ
 顔を隠せば 平 アー苦しいないく 関東より
 のもどりがけ母人に逢て委しく聞た夫のた
 めお主の爲よく賣れた出かしたくくなア 軽
 そふ思ふて下さんすりやわしや嬉しいシタ
 がマア悦んで下さんせ思ひがけなふ今宵請
 出さるゝ 答 平 夫は重疊シテ何人のお世話で
 輕 サアお前も御存じの大屋由良之助様のお
 世話で 平 何んだ由良之助殿に請出される 平
 それは下他からの馴染か 軽 なんいな此中よ
 り二三度酒の相手夫が有らば添はしてやる
 隙がほしくば隙やるさ結構過た身請け 平

扱ては其方を早野勘平の女房と輕イーエ
 しらすじやぞへ親夫のはぢなれば明かして
 何の言いませふ 平 ムンスリヤ本心放埒者お
 主のあだを報する所存はないに極つたな 輕
 イエくコレ兄様有るぞへく 平 有るさは
 何が輕ふは言はれぬコレ斯々々曝げば 平
 ムーイーイー輕 あ平 ムンスリヤ其文體に見た
 な輕 アイ残らず讀んだ其後で互ひに見合は
 す顔と顔それからじやら付き出してついで身
 請けの相談 平 アノ其文體らす讀だ後で輕
 イナ 平 ヤア夫で聞へた妹逆も遁れぬそちの
 命身共にくれよと抜き打ちにげつしと切れ
 ば輕ちやつと飛退コレ兄様わしには何誤り
 勘平さ言ふ夫も有りきつと二親あるからは
 こな様のまゝにも成るまい受出されて親夫
 にあはふと思ふがわしや樂しみごんな事
 もあやまらふ赦して下んせ赦してご手を合
 はすれば平右衛門拔身を捨て可愛や妹

は用御の話電お

南
 5番・701番・711番
 (長)132番・5291番
 西630番



づまは 會宴年新

いのじ感・いか温

理料泉温一南

のまसानみ
 理料泉温一南

橋 ヷ 四

わりや何にも知られへな親與一兵衛殿は六月廿九日の夜人に切られてお果なされたやいヤアそればまあ平アコリヤ〜〜〜だ悔りすな。まだ〜後に悔りの親玉が有るわい、われが請出されて添ふと思ふ勘平はな 兄様勘平殿は平 サア勘平はな 輕い女房様でも出来たのかへ平 エーそんな陽氣な事じやないはい 輕そんなら勘平様は平 サア其勘平は勘平でやつぱり勘平だわい 輕エーコレ兄様勘平様はごふさしやんしたぞいな 平 ムサア其勘平は腹を切つて死だわい 輕 エー〜〜ウン 平 チー道理だ〜様子咄せばワアコリヤ大へんだ 妹が目をまはしたア、誰か居れへか女郎が目をまはした仲居家〜エ、誰も居れへ待〜〜〜幸ひの手水鉢今水をくれるぞ待〜〜〜ソラ水だ、おかるやい〜輕ア〜〜〜平 コリヤどふだ氣が付いたか〜ヨしつかりしろ

〜輕チー兄様平チー兄だ〜ソラ平右衛門だ 輕チー兄さん勘平様はへ平チエー情けねへまだ尋ぬるか。其勘平は友朋輩の面暗に腹を切つて死んだはいやい 輕ヤア〜〜〜それはマアほんさかいのコレなふ〜〜〜さ取り付いてコレ兄様ごふせふぞいな 平チー道理だ 輕ごふせふぞいなア 平チー尤だ 輕どうせふぞいなア〜〜〜平チー道理だ〜〜〜はいやい様子咄せば長い事お勞はしいは母者人言ひ出しては泣き思ひ出しては泣娘かるに聞かしたら泣き死にするで有る必ずいふてくれなそのお頼み言ふまいとは思へ共進も遅れぬそちが命其譯は忠義一途に凝かたまつた由良之助殿勘平が女房さ知られば受出す義理もなし元來色には猶ふけらす見られた状が一大事請け出して差殺す思案の底さ儘に見へたよしそふなふても壁に耳外より洩ても其方が科密書

現代的



電話戒三七五六番

妻 娘

戸無瀬
小 浪

桐 吉
竹 田
紋 文
十 五
郎 郎

人
形

豊	鶴	鶴	豊	野	鶴	豊	野	豊	豊	竹	豊	野	鶴	鶴	鶴	豊	鶴	野	鶴	豊		
澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤		
廣	小	綱	猿	市	清	猿	吉	仙	勝	廣	新	團	團	喜	友	叶	友	猿	友	八	友	廣
				一					三	太	二	伊		代	太		二					之太
夫	重	延	郎	松	茂	若	季	郎	芳	二	郎	郎	三	助	作	郎	若	郎	造	助	助	郎

(床本) 道行旅路の嫁入

浮世と誰いひそめてあすか川扶持
も知行も瀬さかほりよるべも浪の下
人に結ぶ盪谷のあやまりは戀のかせ
杭加古川のむすめ小浪と言號結納も
さらす其儘にふり捨られし物思ひ母
のおもひは山科の舞の力彌をちから
にて住家へおして嫁入も世にありな
しの義理遠慮こしもとつれす乗物も
やめて親子のふたりづれ、都の空に
こさす雪のぼたへもさきむそらば寒紅
梅の色そへて手さき覺へすこゝへ坂
さつたさうげにさしかかり見かへれ
ば富士のけふりの空に消行衛もしれ
ぬ思ひをばはらす嫁入の門火ぞを祝
ふて三保の松ばらについくなみ松街
道をせましさうつたる行列はたれそ

しられごうらやましア、世む世なら
あのごさく一度のはれさ花かざり、
だてを駿河の府中過城下すぐれば氣
さんじに母のころもいそしく二
主のさかづきすんで後聞のむつごさ
さゝめごさ親ならず子しらすさつた
のほそ道もつれあひ男松の肌びつ
たりさしめてからみし新枕、女夫が
中の若縁り抱て寢松の千代かけて替
るまいぞの睦言は嬉しからふさほの
あかす、アノ母さまのさし合な脇へ
こかくしてまり子川宇都の山べのう
つゝにも夢にも早ふ大井川、水のな
がれさ人こゝる都の花にくらぶれば
日影の紅葉色づいてつい秋むきて小
男鹿の夫ゆへならば朝夕にしん苦す
るのも何の其此手拍のうら若き二人
が中にや、産んでれんくころん

やれんくが守はごこへいたごこ
は知た其人に逢ふて恨を何さまアゴ
ふ言てよからふさしんき嶋田のうさ
はらし我身のうへをかくさだに人し
らすかの橋こへて行げ吉田や赤坂の
まれく女のこゑそへ縁をむすば
清水寺へまいらんせ音羽の瀧にさん
ぶりぞ毎日そふいふて拜まんせそふ
じやいな、しゝきむんかうむいれ
いにうきう神樂太鼓にヨイコノゑい
こちの晝寢をさまされた都殿御にあ
ふてつらさむたりたやそふさも
くもしも女夫さかゝらならげ伊
勢様の引合せ躰びたうたも身にさつ
てよい吉左右に嗚見がた黙田のやし
るあれかさよ七里のわたし帆をあげ
て艦びやうしそろへてヤツシツシ楫
さる音はすいむしかイヤきりくす

鳴や霜夜さよみたるは小夜ふけてこ
そくれまでさ、かぎりあるふれいそ
がんと母がはしれば娘もはしり空の
あられに笠覆ひ船路のさもの後や先
しやう野龜山せきとむるいせさあづ
まの別れ道驛路のすゞの鈴鹿こへあ
ひの土山雨かふる。ふり見ふらずみ
定めなき旅はいろくうき中あな
たの松蔭花やかに臺笠立笠大鳥毛行
列揃へぼつ立る武門の曠をありく
さうつすや田子の浦人が聲面白く手
をたき富士の白雪朝日でさける娘
嶋田は寢てさく帯のしんから底から
戀にや夜も日も明ぬ物じやさなサア
サかはいさか増わいな梅の苔さ戀仕
の文はひらく間を待兼山の眞實せい
文色にや憂身をつくす物じやさなサ
アサ可愛さか増わいなうかれて歸る

里わらは、みなくちの葉はいひはや
すいしべ、石塙で大きいしや小石拾ふ
て我夫さなで川さすりつ手にすへて
やびて大津や三井寺のふもさを越て
山科へぼごなきさこへいそぎゆく。

四ツ橋畔

よ り

十一月の文樂座
消息 日誌

△十一月一日

秋暗れの大演習を迎へての本年總出演の最後たる霜月興行の初日を開場。

△十一月二日

全市小學校へ教育家文樂鑑賞會の案内狀を發送す、本二日より十日迄の期間に相當の考慮をほらひました。

△十一月三日

全市旅館へ大演習陪觀旅客のため優待券を届けました「大演習と文樂」聯繫的に國家の觀念を助長させるものとして、いゝ企てであると申されました。

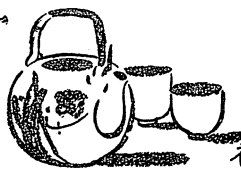
△十一月五日

御入浴中の久邇宮大妃殿下、久邇宮多嘉王同妃殿下の三殿下に東伏見伯、大谷光

暢伯、智子裏方御二方、村雲尼公の御七方を迎へ、臺覽の榮に浴しました。文五郎は靜御前、榮三は松王丸の人形を御覽に入れ白井社長證明申上げ津、土佐、古靱吉兵衛、綱造、等拜謁の光榮を擔ひました、序幕二條城より千本道行の大切まで御興深げに御覽せられました。一同へは有難き思召で御紋葉を御下賜されました。

△十一月十一日

ミス・シヤトルのベチー・ウエグスター嬢がフオックス映畫會社に日本郵船會社の美人投票に榮冠を贏ち得て世界漫遊の途次來觀されました、郵船大阪支店の渡邊包武氏ツーリストの岡村氏に案内されて折柄開演中の「太功記」を見聞して、特別室でサインを残し「外人の見た文樂の感想を認めてゐました。



大及御池橋
茶盤本
電話新町二番

△十一月十二日

ミス・ロレーイン・イー・カック嬢が見えましたホノルルのスタープレチンといふ新聞社の婦人欄主任記者で世界の婦人方面の社會觀察に來たもので文藝にいそしむ人だけに大變に興味を持たれ感想の一文を残して行かれました。

△十一月十四日

陸軍特別大演習に陪觀を差許された外國



武官連も誘導將校に伴はれて特別に觀覽

されました、千本樓道行を全部見て美し

い舞臺繊細な人形の動きに感嘆の聲を放

つてゐました。食堂でテーブルテイを開

き白井社長福井常務等が交々人形に就て

説明をし文五郎榮三等と伴に記念寫眞の

撮影をしました。

△十一月二十日

十一月興行打上げ

△十一月廿三日

邦樂聯盟第一回公演場となる。

△十一月廿五日

京都雁金會(文樂後援の大団体)の特別

開演午後三時開演

繪本太功記

二條城中より尼ヶ崎

尼ヶ崎(つげめ仙糸)

紙屋内の段

心中天網島

(文、駒、)



京割 家じあ

詰西橋綿木

番 元三三二の世話電

新設椅子席は
季節一品料理

十一月廿七日



現代双壁
おせん
おま

菅 四
千本櫻道行

文字、勝平。

小春、鏡、新左衛門

人形、榮三、文五郎

玉次郎、紋十郎他。

清樂會（秋を送る音楽の夕）

十二月の消息

例によつて休演しました。

若手連は中國から九州方面へ紋十郎等の

人形連と旅興行に出かけました。

設備断然東洋第一!

アイス・スケート場

BA (大) リンク 二百坪
(小) リンク 百坪

ウインター・スポーツの王座!

特に初心のお方を歓迎いたします

歳末から新春への
絶好の行楽!

毎日 午前10時 至午後11時
日曜、祭日に限り午前9時より

・一般外來入口 北側電車通り

・御観劇の方は幕間の時間を利用して御自由にお出入りして
頂けます。

ガラス盤上を旋廻する近代感觸の焦點

歌舞伎座 アイススケート場

・好良も最是態状氷結・

・日初且元・

松竹超特作オール・トーキー

『忠臣蔵』 全二十巻

門脇陽一原作

演 實 お 嬢 吉 三 三 巻

林 長 二 郎
山口 俊 雄
古 川 利 隆
伊 井 友 三 郎
伏 見 信 子

中 座

新劇及新聯盟
中里介山作(大華臨時刊行會版)
大 菩 薩 峠 全二十四巻
ヒルの部
武 州 御 岳 五巻
京 島 原 連 暮 卷 十二巻
ヨルの部

三輪龍神・間の巻 十二巻
山蓮幕の巻 一巻
決 闘
青木齋一郎監督・佐原包吉監修
作 實 野 中 山 山
ル ヨ ヒ 蓮 蓮
種 口 住 水 水 水 水
夜 夜 夜 夜 夜 夜 夜 夜
の の の の の の の の
部 部 部 部 部 部 部 部
五 五 五 五 五 五 五 五
時 時 時 時 時 時 時 時
半 半 半 半 半 半 半 半
開 開 開 開 開 開 開 開
幕 幕 幕 幕 幕 幕 幕 幕

浪 花 座

新入 新劇
新 興 座 中 村 扇 屋 合 同 劇
市 川 小 太 夫 一 月 一 日 初 日
初 日 登 の 番 に 限 り 午 前 十 一 時 開 演
瀬 川 春 郎 作 野 淵 辰 演 出
大 塚 克 二 監 修
第一 櫻 一 幕 二 巻
第二 櫻 一 幕 二 巻

増補忠臣蔵 本 下 郎 助 監 修
新 吉 演 劇 新 劇 新 劇
長 谷 川 伸 作 藤 島 一 虎 脚 色
源 太 時 雨 抱 寝 の 長 脇 差
千 葉 猛 鏡 三 幕 九 巻

角 座

志 賀 家 一 一 幕
淡 海 日 初 日
ル ル 日 二 時 半
① 山 本 兼 作
② 恵 川 重 作
③ 近 江 柳 節 作
赤 い 花 三 巻
④ 恵 川 重 作
⑤ 吉 谷 五 十 一 作

紅 葛 一 幕
あいた口 一 幕

松 竹 座

ダグラス・フェアバンクス氏主演
ロビンソン・クルーソー

ジャック・オーキー氏主演
拳骨大賣出し

朝 日 座

第一 榎 姫
・ 遇 一 第 榎 姫
・ 遇 二 第 榎 姫
・ 遇 三 第 榎 姫
・ 遇 四 第 榎 姫
・ 遇 五 第 榎 姫
・ 遇 六 第 榎 姫
・ 遇 七 第 榎 姫
・ 遇 八 第 榎 姫
・ 遇 九 第 榎 姫
・ 遇 十 第 榎 姫

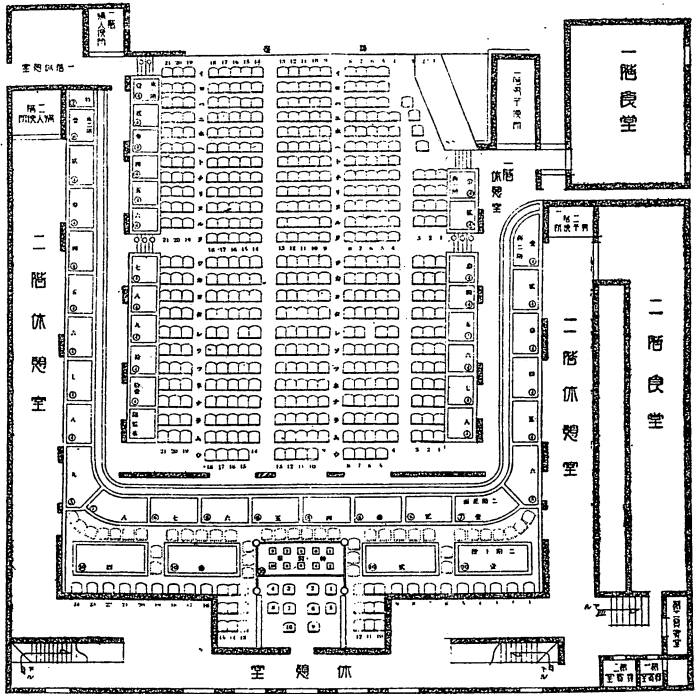
市川右太衛門主演
隊士斬の彌三

辨 天 座

好 好 好 好 好
安 兵 衛
花 解 の 巻

新 粧 八 人 女

文樂座御席場案内



御、観、覧、料、の、外、一、切、御、不、要、の、上、大、部、分、椅、子、席、に、な、つ、て、居、り、ま、す、か、ら、お、一、人、で、も、御、愉、快、に、洋、服、で、も、お、楽、に、御、見、物、が、出、來、ま、た、お、出、入、が、御、自、由、で、す。

前、賣、切、符、壹、等、お、座、席、・、壹、等、椅、子、席、の、お、切、符、は、五、日、前、か、ら、發、賣、致、し、ま、す、ま、た、五、日、以、後、の、お、切、符、も、壹、等、席、に、限、り、御、豫、約、申、し、上、げ、ま、す、か、ら、上、圖、の、座、席、表、に、依、つ、て、お、早、く、御、望、み、の、御、場、席、を、お、申、し、込、み、に、な、れ、ば、お、心、の、ま、く、に、お、好、き、な、處、が、御、自、由、に、さ、れ、ま、す、御、用、命、の、節、お、呼、出、し、の、電、話、は、

南、四、七、一、番、で、御、座、お、ま、す

切、符、發、賣、場、右、指、定、席、切、符、は、當、日、前、賣、さ、も、正、面、西、側、本、家、入、口、に、て、發、賣、し、て、居、り、ま、す。

二、等、席、・、三、等、席、切、符、は、當、日、正、面、入、口、に、て、發、賣、致、し、ま、す。

尚、多、人、數、様、お、團、体、様、の、お、申、込、も、御、相、談、い、た、し、ま、す。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食のバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帯品は

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。すからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帯願ひます。

お場席

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

案内人へ

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由にお飲み下さい。

幕間中は

寫真撮影は絶對にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

場内にて

出演者

場合は事務室へお申込下さい、『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座りますから御使用下さい。

當座御使用の

御休憩の間は

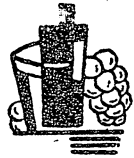
四ツ橋

文樂座

前賣切符専用電話南四七二八番

電話南 三七八八番

文樂座食堂御案内



洋食堂
(西館階上)

スピード・ダイナー
(御定食)
フライ(海老、魚)
オムツケ
ビーフカツレツ
チキンカツレツ
ビーフステーキ(五分間)
カレーライス
コールドチキン
コールドハム
コールドビーフ
マカロニチーンス
アスパラガス
サンドウィッチ
ソーダ水(特製)
文楽スペースアル
ビーフステーキ

時 四 五
價 〇 〇
二 〇 〇
四 〇 〇
四 〇 〇
五 五 五
五 五 五
四 五 五
三 五 五
五 五 五
四 四 四
四 四 四
四 四 四
四 四 四

吸付辨當
御食事(五品御飯香物)
親子丼
にぎり寿司
ちらし寿司
雀司司
雀司司
鐵火巻
赤火巻
お吸物
菊正宗
特アサヒビール
ダイヤレモン
ソーダ水(普通)
紅ソーダ水
アイスクリーム

和食堂
(西館階下)



二 一 〇
〇 〇 〇
一 一 一
一 一 一
三 五 三
五 五 三
三 三 五
三 五 五
五 五 五
五 五 五
五 五 五
五 五 五
〇 〇 〇
〇 〇 〇

酒場 (西館階上)
文楽カクテル
マンハツタンカクテル
ドライマテニイ
アブサンフラツペ
ミリオングラ
ミリオネア
ウイスキー
リキュール
チキニヤツク
ソーダピスケツト



洋酒
お茶

南一温泉料理
經營

各 各 各 各 各
二 〇 七 九 〇 六 六 七
〇 種 種 種 種 〇 〇 〇 〇 〇

昭和七年十二月廿一日発行
昭和八年一月一日發行
大坂・四ツ橋文樂座

大塚 眞三 編輯 成山 桂三 印刷者

大坂市西區土佐堀通一丁目
永井大三郎 印刷所
大坂市西區土佐堀通一丁目
永井日英堂印刷所

文樂座の御宴會

席子椅等……………は覽觀御
食洋・食和……………は食事御
入本床と割役……………附番 (分様名一御) 也錢十五圓四金
影撮別たれるを形人…影撮念記

(すまし致成速様る來出のり隠持の日即)

すま願に前日五けたるな上以様人廿は込申御

いさ下げ附申御へ番壹臺七四兩は話電お



落付た氣分・春と俱に朗かな
大阪でたつた一つの宴會劇場

美はしの聲
 豊かな聲量
 は健康から！



眼鏡肝油



あなたの美と健康の
 爲めに眼鏡肝油を
 お奨め致します。

眼鏡肝油製品

眼鏡肝油

二五〇瓦入 瓶入

五〇〇瓦入 瓶入

五〇〇〇瓦入 罐入

メガネ肝油球

百粒 罇入

三百粒 罇入

全国有名薬店にあり

眼鏡肝油發賣元

伊藤千太郎商會

大阪・道修町